

初期アルメニア史書に見えるエフタルとクシヤン

榎 一 雄

一 は し が き

アルメニアで、現行のアルメニア文字が創られたのは、紀元五世紀の始めのこととされてゐるが、これに伴つて、それまでギリシア語やシリア語で書かれてゐた書物のアルメニア語訳や新しいアルメニア語での書下しが作られ、アルメニア文学史上の黄金時代を現出した。その多くはキリスト教僧の手になり、内容もキリスト教に関係したものが多く、特に注目すべきことはアルメニアの歴史を記した著作がいくつか世に送られたことである。中でも、二二六年から三三〇年までのアルメニアの歴史特にキリスト教がアルメニアの国教になつた始末を記した、アガタンゲロス (Agathangelos) の「ティリダーテス王の治世と聖グレゴリウスの豫言との歴史」、ホレーンのモーゼ (Movsisi Khorenac, Moïse de Khorène) のアルメニア史 (人類の起源から、五世紀中頃のアルメニア文字の発明者メスロップス (Mesrop) とそれに協力したサハク (Sahak, Isaac) との死亡まで)、ササン朝のヤズデゲルト二世 (438—457) と戦つたアルメニアの將軍ヴァルタン (Vartan) に仕へ、後僧侶となつたエキシェー (Eghişei, Eghisee, Elisaeus) がその従軍の見聞を中心に記したといはれる四四九—四五一年のアルメニア対ササン朝戦争史である「ヴァルタンとアルメニア人との戦争の歴史」、三二〇—三八五年 (三四四—三九二年ともいふ) のアルメニア史を敘述したブザンタのファウスツス (P'avstui Bozandaç, Fauste de Buzanta, Faustus

初期アルメニア史書に見えるエフタルとクシヤン 榎

de Byzance) の「歴史文庫 (アルメニア史)」⁽¹⁾、パルペのラザーラ (Lazaray Parpeç, Lazare de Pharbe) が五〇四年に書き、三八八年から四八五年までの主要事件を概説したアルメニア史はその代表的なものである。⁽¹⁾

アルメニアは、紀元五三年(五四年ともいふ)、アルサケス家の支配の下に立ち、⁽²⁾ パルティアと姉妹国の關係に置かれた。ところが、紀元三世紀の前半にパルティアがササン朝に仆されると、それまでの親善關係は一変して、イランとアルメニアとは敵国となり、アルメニアはローマと結んでササン朝に対抗した。即ち、パルティアの滅亡後、暫くササン朝の支配下に置かれたアルメニアは、ローマの後援によつて獨立を回復し、以來、ササン朝に対するローマの前衛國家として存立を続けた。しかるに、三八六年(三八七年ともいふ)、ローマはササン朝と握手してアルメニアを分割し、⁽³⁾ やがて四二九年(四二八ともいふ) ササン朝に屈してそのアルメニア領土を割譲したため、アルメニアの全土はササン朝に併合され、同時にそれまで存続を許されてゐたアルサケス王家のアルメニア支配も終焉を告げるに至つた。⁽⁴⁾

かうした情勢の下にあつた三—五世紀のアルメニアの歴史記録は、ササン朝ペルシア・ローマ帝國及びそれら諸國の周辺の諸民族の動靜について、他の記録に見えない事實を伝え、その欠漏を補ふことが少くない。アルメニア史料が東西の歴史研究者から重要視されるのはこのためである。しかし、アルメニアの史書を利用するに當つて、先づ感ぜられる困難はその成立の事情が明かでなく、成立年代についても異説の多いことである。年代については、例へばホレーンのモーゼのアルメニア史の如き、五世紀説・六世紀説、更に九世紀説があつて、⁽⁵⁾ その不一致に驚かされる。またアルメニア史書の所伝が他の記録に伝へる所と異つてゐる場合、殊にアルメニアの史書にのみ見えてゐて、他に比較すべき資料を欠く場合には、それが果して事實であるか否か、事實でないとすれば何故さうした所伝を生じたかを判定しなければならない。かうした判定は、それぞれの史書の全体的信憑性に關連してゐることは勿論であるが、それらの史書が編纂物であることを考慮すると、その

内容の一事についてそれら史書相互の、或ひは他の記録に見える関係記事を比較することによつて、そのもとづく所、乃至はその最も古い形を確め、その後の増補又は発展の迹を探ることが必要である。

アガタンゲロス・モーゼ等の伝へる所によると、パルティアがササン朝に滅された時、アルサケス王家の一族であるアルメニア王コスロー(Khosrov)は、アルバニア・ジョルジア・フン等の諸民族と協力し、十年に亘つてササン朝領土に侵入してこれを荒廃させた。ササン朝のアルダシール(Ardashir I, 226—241)は賞を懸けてコスローを暗殺する者を募つた。ペルシアにゐたアルサケス家の一員アナグ(Anag)は、その旧領土を返すといふアルダシールの誘ひにつられてこれに応じ、アルメニアに入つてコスローを暗殺した。アナグの二人の子はアルメニアの追求を避けて、それぞれローマ領とペルシアとに逃れた。ローマ領に逃れたグレゴリウス(Grigor)は、後、聖グレゴリウスと呼ばれ、アルメニア王ティリダーテス(Tiridat)(コスローの子)を帰依させ、キリスト教をアルメニアの国教にする大功労者となつた。そしてゼノブ(Zenob)の「ダローン(Darôn)の歴史」なるものによると、グレゴリウスの弟スウレン(Suren)はその叔母(父アナグの妹)でエフタル国王(或ひはその子ともいふ)の妃となつてゐたホスロヴウヒ(Khosrovuni)なる人の所で養はれ、その後デヘン(Djen, Çen)国に移り、その王となつた。

またモーゼには、パルティア帝国の建設者アルサケスは最初クシャン人の国の中心であるパフル(Pahl)といふ町に君臨し、王朝を建てたことを伝へてゐる。

ササン朝ペルシアがその建国以後十年の久しい間、アルメニア王のために国土を蹂躪されたといふ所伝は、ローマ側の記録の伝へる所と全く反対である。ローマ側の記録によると、ササン朝のアルダシールはアケメネス王朝の旧領土の領有権を主張して、ローマと開戦(二三〇—二四二)、ローマはアルメニアその他の北方民族と連合して三方からササン朝領土に進撃

したが、ヘルシア軍に勝つことが出来ず、二四二年、ローマ軍の司令官フィリップは軍士に推されて皇帝となり、ローマに赴くためにササン朝のシャープール (Shāpūr, 241—272) と媾和し、ササン朝はアルメニアを占領したことになる。⁽⁵⁾これに対比すべきササン朝自身の記録が失はれてしまつてゐる今日、これら兩種の対蹠的な記事の正否を判定することは必ずしも容易でないが、コスローが報復としてヘルシア全土を荒し廻つたこと、その結果同族の刺客のために暗殺されたこと、その刺客が聖グレゴリウスの父であつたこと、などは如何にも説話めいてゐて、史実としては容易に受取り難い。また、エフタル民族の活動は五世紀の中頃以後のことであるから、スウレーンが身を寄せたエフタルがエフタル民族と同じであるとするれば、それは三世紀の前半に既に存在したことになり、スウレーンが王となつたといふチェンはアルメニア語で支那を指す名称であるから、スウレーンに関する所伝にも説話的色彩が多分にあることが容易に考へられる。

更にまた、クシヤンがカニシカ王の名高いクシヤン民族であり、パフルがバクトリアの中心バルフ (Balkh) であるとする、アルサケス朝の発祥地はバクトリアにあつたことになる。しかし、我々の知つてゐる所では、アルサケスはカスピ海の中間にゐた遊牧民族バルニターヘ (Parni-Dahae) 族の一員で、オコス (Ochos) 河の流域からバルティアに侵入してバルティア王国の基礎を築いたのであるし、クシヤン民族が史上に出現するのは紀元前後の頃で、到底アルサケスの興つた紀元前三世紀の中頃まで遡らせることは出来ない。

そこで、スウレーンの逃れたエフタルが果してエフタル民族であるかどうか、あるとすれば何故に彼がエフタルに結びつけられたのか。また、アルサケスの君臨したクシヤンがクシヤン民族であるとすれば、これ亦何故にさうした伝承が生じたのであるか。これらの点について考へてみたのが本篇である。

エフタルやクシヤン民族について、アルメニア史料の中に興味ある記述のあるらしいことは、これまで諸家の論考を知つ

てゐたのであるが、断片的な引用文からはその記述の全貌を窺ふことが出来なかつた。その後、関係資料の蒐集を心がけてゐるが、アルメニア史書の多くは十九世紀の中頃かその前後に、メヒタリスト (Mechitarists) の手によつて世に送られたもので、今日蒐集が容易でなく、これに関する研究も特殊な専門學術雑誌に公にされてゐるものが大部分で、これを集成することも、亦早急には望めない。僅かに最近に至つてラングロアの編訳した「アルメニア古今史家集成」(Victor Langlois, ed. par, *Collection des historiens anciens et modernes de l'Arménie*. 2 Vols., Paris 1867—1869) を利用することが出来、本文の始めに名を列した代表的なアルメニア史書の内容を知ることが可能となつた。この研究は専らこの仏訳本が手がかりに進められたものである。私の手にし得た唯一のアルメニア語テキストはホレーンのモーゼのアルメニア史の原文対照のフランス語訳 (*Moïse de Khorène, auteur du Ve siècle, Histoire d'Arménie, Texte arménien et traduction française par P. E. Le Vaillant de Florival, Venise 1841*) である。ラングロアの編訳は内容の概要を知るには極めて有用便利なものであるが、原文を欠いてゐるため細かい点になると隔靴搔痒を嘆ぜさせられる場合が少くない。ホレーンのモーゼのアルメニア史はラングロアにも収められてゐるが、右に掲げた原文対照の仏訳の方が直訳に近く、原文特に固有名詞の原綴を知るのに便利が多いので、主としてこれに拠つた。以下の文中に Langlois として引くのは、右の「アルメニア古今史家集成」であり、ホレーンのモーゼとして引くのは右のヴァイヤン編の原文とフランス語訳とである。

アルメニア学に全く無知識な者の手になるこの論考、殊に翻譯を通じてのかうした研究に欠陥の多いであらうことは、十分承知してゐる。それにも拘らずこれを公にするのは、この問題について特別な研究がこれまで公にされたことを知らないためと、エフタルやクシャンに関するアルメニアの所伝の成立について、若干得る所があつたと信ずるからに他ならない。なほ固有名詞の原語に忠実な転写は、H. Hübschmann, *Armenische Grammatik*, I, 2, Leipzig 1897 の方式に従つた

が、組版を容易にする必要から特に必要がある場合にのみ限り、他はラングロア及びヴァイヤンの転写をその儘掲げる。ghad (yat) を gh とも y とも写す不統一も敢へてその儘にした。但しラングロア等が ou と転写してゐるものは、多くの場合 u と改めた。

本篇の趣旨は説話の発展を比較することにあるので、文中、屢々長い引用を敢へてしてゐる。読者がその理由を諒承して、冗長を咎められることなければ幸である。

二「エフタル王国史」

エフタル (Hephthalites)⁽⁷⁾ の名は、アルメニア王コスローを暗殺したアナグの子スウレーンが逃れた所として伝えられてゐる。このことを最初に伝へたのは、シリアのエデッサのキリスト教僧バルデサネス (Bardesanes) の著とされてゐる「エフタル人国史」(Histoire du royaume des Hephthalites) である。この書は十世紀後半まで存在してゐたと思はれるが、その後失はれ、僅かにその内容の一部がグラグ (Glag, Glak) (シリヤ南部の地名) の僧ゼノブ (Zénob, Zenobius) (三三三又は三二四年歿) の「ダローンの歴史」(Histoire de Darôn) の中に引用されてゐる (Langlois, I, p. 67, 342—343; Prud'homme, Histoire de Darôn, JA, 1863, 2, p. 430—431)。ダローンは⁽⁸⁾アルメニアとシリヤとの国境にあつて、アルメニアにおけるキリスト教発祥地であり、「ダローンの歴史」はこの地へのキリスト教の輸入とその発展、キリスト教のアルメニア国教化とに關して、それに直接参加した聖クレゴリウスやゼノブの書簡と称するものを集めたもので、問題の部分はゼノブの書簡の中にある。その記事の大意は次の如くである。

ササン朝「のアルタシール (Artashir, 224—241)」が起つてバルティアの最後の王アルタババン (Artaban) を殺すと、

アルタバンの兄弟でアルメニア王のコスロー(217—238)⁽⁹⁾はこれに復讐すべく、ササン朝領のペルシアに侵入を繰返し、十年に亘つてペルシアを蹂躪した。ヂェン(Dien)の王がこれを止めて、媾和させようとしたが、成功しなかつた。ペルシア王はコスローを殺すべく人を募つた所、パルティアのアルサケス王家の一族であるアナグ(Anag)がこれに応じた。ペルシア王は成功の暁は、バルタヴ(Bardav)のバフラヴ(Bahlav)⁽¹⁰⁾を恩賞として与へることを約した。

アナグはその弟及び妻子をつれて、アルメニアに入り、アルタシールのために追放された風を装つてコスローに近づき、二年目の末に狩猟中のコスローに秘密の用件を伝へるふりをして、これを斬殺した。アナグとその一党はパルティアに着く前に水に溺れて死んだが、ペルシア王はコスローの死んだ日を祭日と定め、バルタヴを生き残つたアナグの一族に与へた。さてコスローは死ぬに當つて、暗殺者アナグの一族を殺すことを命じた。ペルシアの名族の出身であるブルタル(Purtar)は、アナグに従つてアルメニアに来てゐたが、アルタズ(Ardaz)からカパドキアに移り、カエサレア(Caesarea)に行き、その富裕なキリスト教徒エウターレ(Euthale)の妹ソビーイ(Sophie)と婚した。ブルタルはカエサレアに住むこと一年、妻を伴つてペルシアに帰らうとしてゐる時に、アナグ一族襲殺の命令が出たことを知り、アナグの妻オコイ(Okoi)の許に行つてアナグの子を受取り、妻ソビーイに養育させた。

この子が、前述の如く、後のグレゴリウス(Grigor)で、アルメニア王ティリダーテス(Tirdat III, 252—330)⁽¹¹⁾の時キリスト教をアルメニアの国教にした人である。(ゼノブはグレゴリウスの生立ちについて詳述してゐるが、それは本題に関係がないのですべて省略する。)アナグにはもう一人スウレーン(Suren)といふ男子があつたが、この子は叔母であるエフタル王妃に育てられ、成長の後、ヂェン人の国に移り、そこを支配したといはれてゐる。

その「グレゴリウスの」弟スウレーンはその保育者によつて「ペルシア人の門」(la porte des Perses)に移され、そ

の父の妹でエフタル人の王ヂェヴァンシル (Djevanschir) の妻なる人に育てられた。そして成人すると、コスロヴウヒ (Khosrovuhi) 「エフタル王の妻の名」の死後、ヂェン (Djen) 人の地に移り、そこに十年止つた。そして更にその後十九年その国を支配した。

ゼノフは更に多くの人々はグレゴリウスの弟をジャックといつたと述べてゐるが、それは誤でジャックはグレゴリウスの父「即ちアナグ」の妹コスロヴウヒ「即ちエフタル王の妻」なるものの子であること、ジャックの甥が後にゴート族の王になつたことを記して、

「ジャックの母」コスロヴウヒが死に、「ジャックの」父ディラン (Diran) がレブニ (Lephni) 族の王レクス (Rekès) に殺されても、ジャックはその妹と同じ所に住んでゐたが、終にしばらくしてその甥 (妹の子) はゴート人の国に行き、その王となつた。その後、ティリターテス「コスローの子、アルメニア王」はギリシア人「ローマ帝国人」の所に行き、この人「ジャックの甥」を捕へた。それは彼がギリシア人の王ディオレティアヌスに戦をしかけたからであると、アガタンゲ「アガタンゲロス」は語つてゐる。

そして、ゼノフはこれに続けて、

もし汝がこれらのすべてを正確に知りたいならば、おお、幸福なヴィクトールよ、ギリシア語で書かれたエフタル人の王国の歴史或ひはヂェン人の王国について書いた「歴史」を読まれよ。この書はエデッサの歴史家バルド (Bard, Part) の所にある。(Langlois, I, p. 343; cf. Prud'homme, Histoire de Darôn, JA, 1863, 2, p. 430—431)

と書いてゐる。エフタル人の王ヂェヴァンシルはラングロアには Djévanschir, roi des Hephthalites とあり、同じ記事をフランス語訳したプリュドントには roi Djévanschir, Hephthal とある。またエデッサの歴史家バルド (Bard, Part)

がバルデサネスであることは、後に引くウクタネース (Ukhtanēs) にゼノブのこの記事に相応ずる事実を述べて、バルデサネス (Bardencanay) の最後の書を参照すべきことを書いてゐるのによつて明かである。エフタル人の王国史或ひはデエン人の王国史といふのは一書なのか二書なのか、必ずしも明かでないが、エフタル人の王国とデエン人の王国とは別国として扱はれてゐるので、今は二書と考へて置く。

パルティア王アルタバン (四世、或ひは五世とも数へられる) がササン朝のアルダシールに滅されたのは、二二四年乃至二二七年或ひは二二九年のことといはれる⁽¹²⁾。従つてその後十年のこととして記されてゐる、アナグのコスロー殺害は二二四乃至二二九年のことである筈である。そしてグレゴリウスはアナグがアルメニアに入つてから生まれたことになつてゐるので、その弟のスウレーンはその後に出生し、アルメニアを脱した時は、まだ一、二才の幼児であつた筈である。彼はエフタル王国に逃れて成人し、その伯母の死後、デエン人の国に移り、合計二十九年そこにゐたといふのであるから、移つた年代を彼の十五才前後のこととしても、彼は紀元二三四—二三九年から四十四、五年間は生きてゐたことになり、いはゆるデエン人の王国史の記述は二八〇年代に及んでゐたと考へなければならぬ。更にスウレーンの甥がゴート族の王になり、ローマ皇帝ディオクレティアヌス (284—305) と戦つたことも、この書に記されてゐたのである。ディオクレティアヌスとゴート族との戦の有無、年代は明かでないが、いづれにしてもそれはディオクレティアヌスの治世で三世紀の末から四世紀の始に至る或る時期のことにならう。するとデエン人の王国史なるものは、早くても三世紀の末か四世紀の始に書かれた書で、到底それ以前ではあり得ない。

一方、この書の著者とされてゐるバルデサネスは、一五三 (又は一五四) 年に生まれ、二二二 (又は二二三) 年に歿した人であるが、ホレーンのモーゼ (Moïse de Khorene, II, 64) によると、バルデサネスはローマ皇帝マルクスシアウレリウスにあるが、

ントニヌス (161—180) 時代に歴史家として栄え、後、アルメニアのアニ (Ani) に来て諸寺院の歴史を読み、これに自身の時代の事件を書き加へてシリア語で歴史を書き、やがてそれがギリシア語に訳された。モーゼのアルメニア史のアルタヴァズド (Artavazd II, 123—95 B. C.) からコスロー (A. D. 217—238) までの記事は、このバルデサネスの著述から書抜いたものである。しかし、バルデサネスの記述はコスローの治世の末にまで及んでゐたものではなかつたらしい。それはモーゼはコスローがパルティアの滅亡に反撥してササン朝に復讐する話を改めて記し、それがアガタンゲロスの著述に基いてゐることを明記してゐるのによつて知られる (Moïse de Khorène, II, 66, 67)。

このやうに考へると、コスローのササン朝領土侵入、ササン朝によるコスローの暗殺、暗殺者アナグとその一族に関する始末を書いた「エフタル人王国史」・「ヂェン人王国史」なるものが、バルデサネス以後の人の手になることは、甚だ明かである。

また、これらの二書を引用してゐるゼノブは、聖グレゴリウスの弟子で、その秘書役をつとめてゐたといはれ、グレゴリウスの委任によつてタローンの Neuf-Sources (Innagrian) の寺院の司教を二十年間勤め、三三三年の末か三二四年の始めに死亡したといふ⁽¹⁶⁾。その「タローンの歴史」は性質や伝来の頗る怪まれてゐる書物であるが、ラングロアによると、現行本はゼノブの原書に後人が相当の改補を施したもので、それらの改補は現行本に続けてその後の事実を述べた「タローンの歴史」の著者である七世紀の人マミコニアン⁽¹⁷⁾のヨハネ (Yohan Mamikonian) の手によるものであるといはれ、一説には現行本の成立は八—九世紀に降るともいはれてゐる⁽¹⁸⁾。

今日まで知られてゐる所によると、ゼノブの原本はシリア語で書かれ、それから少くとも二種のアルメニア語訳が作られた。その一つが現行本である。一つは既に失はれたが、それより古いもので、その一部分が十世紀後半の人エデッサの司教

ウクタネース (Oukthanes) の「アルメニア人とゾルヂア人との宗教上の分離の歴史」⁽¹⁹⁾の中に引用されてゐる。その内容は現行本と若干異なるものであるが、プリュドナムが引用してゐる所によると、右に引いたゼノプの記事に相応ずる部分が次のやうになつてゐる。

シリア人ゼノプは、その歴史の中で、「スウレーンに關することを」正確に語つた。一方この子「スウレーン」は成長し若者の年令に達すると、多数の軍隊をもつて叛乱の旗幟をあげた。そしてチェン人とデルベンド (Derpend) との地域に侵入した。そこで、戦術を用ゐた王侯たち (princes) を欺き、彼は「これら」二つの國を支配し、それを自分の權威の下に置き、十九年間王位にあつた (Hist. de la sép. rel. des Arm. et des Géorg, p. [JA, 1863, 2, p. 431 n. 1])。これによると、スウレーンはデェンに平和的に移つたのではなく、武力を用ゐて侵入したのである。そこでプリュドナムはこの記事は現行本のゼノプの記事を訂正するものであるとし、更に次のやうな記事をウクタネースから引いてゐる。

これらの事実「スウレーンがエフタル王妃に養はれ、デェンの王になり、その後兄弟のジャックの甥がゴート族の王になつたこと」をゼノプは信用の出来る人々、彼の国民、彼の同郷人に物語る。これらの事実を諸君は我等の教父達の話によつて自分自身で完全に知つてゐる。

そしてその眞実を確言するために、ウクタネースはつけ加へていふ。

しかし、もし諸君がこれらのことを正確に知らうと思ふならば、エデッサのバルデサネスの最後の書物を読まれよ。著者は同時にティリターテスとフラチェ [Hratché, ゴート王の名] との交した会話を非常によく伝へてゐる。フラチェをその後づつしたか？ 私には知らないところの歴史家はいふ (Oukthanes, Hist. de la sép. rel. des Arm. et des Géorg, p. 68 [JA, 1863, 2, p. 431 n. 1])。

以上の三ヶ条の引用文はウクタネースの書の同じ頁から引用されてゐるので相連続した記事であることが察せられるが、ここにいふバルデサネスの最後の書物といふのは、ゼノブの引用と照合はせて、問題のエフタル人の王国史とヂェン人の王国史のことを一括して言つたものと考へられる。尤もこれだけではウクタネースがスウレーンがエフタル王国で養はれたことを書いてゐるかどうか明白でないが、ブリュドナムは、現行本のゼノブにスウレーンがエフタルのヂェヴァンシルの妻である叔母に養はれたと書いてゐる所に注を加へて、

アナグの妹のコスロヴウヒは、ヂェヴァンシルの息子のディランの配偶者で、ヂェヴァンシル自身の妻ではない。

とし、ウクタネースの右の著書 p. 68 (前の引用文と同じ頁) を参照すべきことを注意してゐる (JA, 1863, 2, p. 428 n. 2)。但し、現行のゼノブは、コスロヴウヒをエフタル王ヂェヴァンシルの妃とする所伝と、ディランなるものの妻である所伝と併せ記してゐるが、ヂェヴァンシルとディランとの關係については触れてゐない。いづれにしてもウクタネースの見たゼノブにコスロヴウヒをヂェヴァンシルの子ディランの妻と書いてゐる以上、スウレーンがエフタル王国に養はれたといふ記事は、ウクタネースの参考したゼノブにもあつたことは明かである。即ち、ウクタネースに引くゼノブは、スウレーンがエフタル王ヂェヴァンシルの息子の妻である、その叔母に養はれたといふことと、スウレーンが成人してヂェン人とデルベンドとの地方に武力侵入し、これを支配したことを伝へてゐる点において、現行本のゼノブと相違してゐたことが知られる。

ウクタネースの参照したゼノブは、ゼノブのシリア語の原著を同時代の人がアルメニア語に訳したもので、ゼノブの原著に近いものであると考へられてゐる。⁽²⁰⁾ もしさうであるとすれば、「エフタル人王国史」・「ヂェン人王国史」の二書はゼノブの原本に挙げられてゐ、ゼノブの歿した三二三—三二四年以前に存在したことになる。しかし果してさうであらうか。

先づウクタネースの参照したゼノブがウクタネースの時代即ち十世紀の後半に存在してゐたことは確かである。そしてそ

れが現存のゼノブと若干内容を異にしてゐたことも疑ひない。しかし、それだからと言って、それがゼノブの原本に近かつたと断定することは出来ない筈である。そこでゼノブ以外の記録にアナグのコスロー暗殺やそれに伴ふ二人の子の逃走についてどのやうなことが伝へられてゐるかを検討し、その中でゼノブの伝へる所がどういふ位置を占めてゐるかを明かにしてみよう。

アナグのコスロー暗殺とその二子の逃亡とは、アルメニアのキリスト教の開祖であるグレゴリウスの出生と彼がキリスト教徒になつた機縁とを物語るものであるために、アルメニアの史書には必ず記されてゐる。中でも最も詳しいのは、ゼノブと同時代か、若干後の人で、コスローの子ティリダーテス〔三世、252—330〕の祕書であつたアガタングロスの「ティリダーテスの治世と聖グレゴリウスの豫言との歴史」(Langlois, I, p. 114 ff.)である。話の筋はゼノブと同じであるが、内容は非常に詳しくなつてゐる。アガタングロスはコスローが十年に亙つてペルシア王治下の全土を侵し、これを荒廃させたので、ペルシア王は諸王(rois)・知事(gouverneurs)・諸侯(satrapes)・將軍(généraux)を集めて対策を協議した。その時、その会議に出席してゐた、パルティア人の帝国の主要な知事の一人であるアナグ(Anag)なるものが、ペルシア王のために讐を報ずることを申し出たので、ペルシア王は

もし汝が全力を尽して自分のために讐を報いてくれるならば、汝の家族の世襲財産としてパフラヴ(Pahlav)の国を汝に与へよう。

と言つた、といふ前置きをして、次のやうに暗殺の経過を伝へてゐる。この前置きの中に、デエン王がコスローに干涉を加へたといふ記事のないことは注意すべきである。

かくてパルティア人〔即ちアナグ〕は、すべての準備をととのへ、その弟、その召使、彼等の妻、彼等の子供及び自身

の従者の全部と共に、宛もアルメニアに移住し、ペルシア人の王〔ササン朝〕に謀叛したかのやうにして出発した。そしてウディ(Udi)州のカグカグ(Khaghkag)の町においてコスロー王に謁した。そこはアルメニア王の冬の宮殿の所在地であつた。これを聞いてアルメニア王は喜び、来て彼〔アナグ〕に会ひ、特にアナグが虚構の話を始め、その来住の秘密の意図を、次の如く語ると、非常に喜んで彼を受入れた。アナグの言ふことに、「私は私達の敵〔即ちササン朝の王〕に復讐するために、貴下の所に來たのです」と。王は彼がその家族の全部をつれてゐるのを見て、これを真実であると信じ、彼に主権者に与へるやうな名譽を与へ、その王国における第二の高位を授けた。かくて、嚴寒の冬の日も一日中歎びの中に経過した。やがて春の門が開き、軟い風のそよぎを詞節する日が來た時、王はこの地を離れ、アララト(Ararat)州のヴァガルシャバッド(Vagharschabad)にその一党と共に下向した。王がそこで喜んで休息してゐる時、王は兵を興して新たにペルシア人の境域を蹂躪しようと考えた。パルティア人〔即ちアナグ〕はこの決心を知ると、自分がペルシア人の王と結んだ契約と約束を思出した。そして同時に又、パフラヴ(Pahlav)と呼ばれる自分自身の國を回復したいと考へ、犯行を熟考した。散歩をし、秘密の用件を話し合ふためといふふりをして、王とその弟とを分離し、彼等〔アナグの一行〕は鋭い劍を帯びた。突然、彼等は劍を抜き、それで王を撃つた。この暗殺の報知は、直ちに到る所に拡がつた。群衆と哀悼は次第に大きくなつた。しかしこの間に暗殺者達は馬に跨り逃れた。アルメニア軍の將軍達は、「暗殺者の」逃走を知り、何軍かに分かれて追跡した。その一部はアルダシャッド(Ardaschad)の町に通ずる橋に至つた。それはアラクセス(Araxes)河がその流れの岸にまで溢れ、雪と氷が融けて水が著しく増してゐたからである。他の一部も亦、メザモル(Medamor)橋といふヴァガルシャバッドの町の橋を越え、アルダシャッドの橋のはづれに至り、逃亡者を狭い通路に追ひ込んで、ダベル(Dapher)の橋から河の中に投げ込んだ。次に彼等

〔追跡者〕は哀悼の叫びを挙げて帰り、全国は一樣に王のために涙を流した。

王は息を引取るに先立つて、〔その暗殺者の〕一族を襲殺することを命じた。そこで大虐殺が始まった。成年の男子も、右手と左手の区別のつかない年頃の者も、免れなかつた。女子すら劍の下に仆れた。二人の小児のみは、保育者の御蔭でバルティア人〔アナグ〕の息子として殺害されることを免れ、死を逃れた。その一人はペルシア人につれて来られ、もう一人はギリシア〔ローマ帝国〕につれて行かれた (Langlois I, p. 119—121)。

ヴァガルシャバッドはアララト (Ararat, Airarat) 州の町で、アルメニア首都であり、キリスト教の大中心地であつた。⁽²¹⁾ アルダシャッドも亦アララト州の一中心で、共にアルメニアの中央部、アラクセス河の流域に位置してゐる。⁽²²⁾

アガタンゲロスの記事は最も詳しい。ホレーンのモーゼ (II, 74) は、アナグのコスロー暗殺の極めて概略を説明してゐるのみで、詳しいことはアガタンゲロスが語つてゐるとしてゐる。ただモーゼがアガタンゲロスと違つてゐる所は、アガタンゲロスはアナグをバルティア人の帝国の主要な知事の一人であるとしてゐるのに、モーゼはスウレーン・バフラヴ (Gourène Bahlav, Surén Pahlav) 族 (rece) の一員としてゐることである。またモーゼにはグレゴリウスがアルメニアに至る途中で母の胎内に宿つたことを、或る老人の談話として記してゐるが、スウレーンの存在については、全く触れてゐない。このやうに、最も詳しいアガタンゲロスにチェン王がコスローに干渉して成功しなかつたことと、スウレーンがチェンに移つたことは勿論、スウレーンの名も見えず、単にアナグの二子がローマ領とペルシアとにつれて行かれたとのみを記してゐるのには注意に値する。

今伝へられてゐるアガタンゲロスの「ティリダーテスの治世と聖グレゴリウスの予言との歴史」は二二六年から三三〇年までの歴史を扱つたものであるが、その内容はグレゴリウスがティリダーテスを教化指導してキリスト教をアルメニアの国

教にした次第を説明した一種の聖者伝である。

ラングロアは、ゼノブにアガタンゲロスを引いて、

ティリダーテスがギリシア人の所にゐたので、彼〔ゴート人の王フラチュ〕を捕へた。これは彼がギリシア人の王ディ
オクレティアヌスに戦を挑んだからであるとアガタンゲロスは語つてゐる。

といつてゐるのに、今のアガタンゲロスにこの記事がないといふ理由で、ゼノブの見たアガタンゲロスをその原本であらう
と推定し、その原本はその後失はれてしまつたとし、その時期について、ホレーンのモーゼ及びパルベのラザーラの引くア
ガタンゲロスは今のテキストと同じであるから、モーゼやラザーラの時には既に原本はなくなつてゐたもので、今本の出来
たのは五世紀の始であらうと論じてゐる。⁽²⁴⁾しかし、ティリダーテスがゴート王を捕へたことは今のアガタンゲロスにも明記
されてゐるし、⁽²⁵⁾その理由がギリシア人の国（ローマ領土）に侵入したためであることは、本文を読めばよく判るのであつ
て、ゼノブの引く所が今のアガタンゲロスと違つてゐるとは考へられない。パルベのラザーラのアルメニア史は、アキニア
ン（P. N. Akinian）の研究に従ふと、五〇四年に書かれたといふから、⁽²⁶⁾ラザーラに引用されてゐるアガタンゲロスが今の
本の記事と同じであるとすれば、今の本は五〇四年以前に成立してゐたものである。グートシュミット（A. v. Gutschmid）
は今のアガタンゲロスはいくつかの独立の諸篇を集めたもので、今の形に纏められたのは四五六年のことであるとし、ヒュ
ブシュマンは五世紀、フルラーニは五世紀後半としてゐる。⁽²⁷⁾アガタンゲロスの原形やそれに加へられた後人の改補について
はまだ従ふべき研究は出てゐないが、⁽²⁸⁾少くとも問題の部分については、今のテキストより古いと信ぜられるテキストの存在
を立証する資料は見当らない。従つてアガタンゲロスの原本のこの部分については今本と餘り違つてゐなかつたとするが妥
当のやうに思はれる。

パルベのラザールは、そのアルメニア史の巻頭に特に「アガタンゲロスの信憑性について」と題する一節を設け、アガタンゲロスの記事が他の著作家の記事に比べて正確であることを激賞し、更に

アガタンゲロスはアルサケス家のアルタバンの帝国の衰亡、ササンの子、スタフル (Sdahr = Istakhr) のアルタシールの主権〔獲得〕、コスローの復讐と高慢なスタフル人〔即ちアルタシール〕の苦悩、彼がコスローを殺す方法を発見した人に〔した〕陰謀と約束、アナグの不実な計画と憎らしい方法による彼のコスロー殺害、その時から如何にしてアルメニアが外国人の支配の下に置かれたか、如何にして保育者 (gouvernantes) がコスローの子供達を遠い国 (un pays jointain) に隠して命を助けたか、如何にして〔コスローの子〕ティリダーテスが英雄として〔ローマ帝国からアルメニアに〕帰り、その祖先の国王を勇敢に再征服し、勝利を齎したか、如何にして聖グレゴリウスが進んで仕へようとしてティリダーテスの所に行き、〔キリストの〕真の友であると宣言したか(略)、について整然と説明し記してゐる。これら及びその他の更に注意に値することのすべては、幸福なる神の召使アガタンゲロスによつて、その信すべき真実の著作の中に語られてゐる。(Langlois, II, p. 259—260)

と記してゐる。これでラザールの見たアガタンゲロスの中にアナグのコスロー暗殺の記事があつたことが知られるが、ここにコスローの子供達が遠い国に逃れたとあるのは、コスローの暗殺の結果、アルメニアはササン朝のペルシア軍によつて占領されたので、その手を逃れて当時幼年であつたコスローの子ティリダーテスがローマ帝国に走り、その保護に頼つたことを指してゐる。ラザールが子供達と複数にしてゐるのは、よく判らないが、いづれにしてもこれはアナグの子供のことではない。

このやうに、今のアガタンゲロスの本文とそのラザールによる要約とから推測すると、アガタンゲロスに本来アナグのコスロー暗殺の記事があつたことは確かであるがヂェン王がコスローに干渉したことやアナグの子スウレーンのエフタル王国

への逃避やチェン国支配のことが記されてゐた形迹はない。ゼノブがこれらのことを記してゐるのは、アガタンゲロス以外の材料によつてゐるので、その材料は必ずバルデサネスに仮託された「エフタル人王国史」や「ヂェン人王国史」であるに相違ない。アガタンゲロスにはアナグの二子がベルシアとギリシア（ローマ帝国）につれて行かれたとしか書いてゐないが、これはアガタンゲロスのこの記事が出来た頃（晩くとも五世紀後半）にはさうとしか知られてゐなかつたからであらう。ギリシア（ローマ領土）に逃れたのが、アガタンゲロスの記録の中心人物である聖グレゴリウスであつて、詳しい記述がなされてゐるのであるから、スウレーンについて何の記事もないのは、この人について何も知られてゐなかつたために相違ない。アガタンゲロスにはディオクレティアヌスに戦を挑み、ティリターテスに捕へられたゴート王を、単にゴート族の王としてゐるのみで、それがアナグの妹の孫であることは勿論、アナグやグレゴリウスの親族であることには、何等触れてゐないことも、ゼノブの所伝がアガタンゲロスのものより更に発展した形を示してゐることを推測させるものである。つまり、アガタンゲロスにはなかつた筈の、スウレーンのエフタル王国・ヂェン王国行きの説話が、ゼノブ（三二三又は三二四年歿といふ）の著述に掲げられてゐるのは、同じ時代に二つの系統の話が伝へられてゐた結果ではなく、ゼノブの手になるといはれてゐる記事が、実はもつと後の時代に出来たものであるためであらう。それはヂェン王国に関する話が少くともこれより半世紀後の紀元三七〇年代か、それ以後、五世紀の前半以前にアルメニア人の間に語られるやうになつたと考へられることによつて確められる。

三 「ヂェン人王国史」

「エフタル人王国史」・「ヂェン人王国史」の二書がバルデサネスに仮託した後人の著作であることは、前章に述べた通り

であるが、その著作年代を決定する手がかりの一つは、アルメニアでヂェン王国について関心がもたれるやうになつた時期を明かにすることである。

ヂェン王国については、現行本のゼノブに

ヂェン人の王 (le roi des Djén) が「アルメニア王ロスローのペルシア侵入に」干渉した。しかし彼の憤懣を解き、彼に講和させることは出来なかつた。(Langlois, I, p. 342)

とあり、ウクタネースに引くゼノブに

「スウレーン」は「ヂェン人とデルベンド (Derbend) との地域に侵入した。そこで、戦術を用ひて王侯たちを欺き、彼は「これら」二つの国を支配し、それを自分の權威の下に置き、十九年間王位にあつた。(JA, 1863, 2, p. 431 n. 1)

と記してゐる。これによると、ヂェンはアルメニアとペルシアの国境附近でアルメニアに干渉することが出来、デルベンドに近い所にあつたやうに見える。デルベンドはコーカサス山脈の東端とカスピ海との中間にある隘路で、コーカサス北部とアルメニア・ペルシア方面とを連絡する要地である。しかしこの方面にヂェンといふ土地或ひは民族のあつたことは、他に全く所見がない。

ヂェン国はまたスウレーンがエフタル人の王国から移つた地域であるから、エフタル人の王国にも近かつた筈である。エフタル人の王国の位置については、僅かにスウレーンが「ペルシア人の門」に移されて、エフタル王妃に養育されたといふゼノブの記事から、「ペルシア人の門」に近いとされてゐたと想像出来るにすぎない。サン＝マルタン氏はこの「ペルシア人の門」をバルフ (Balkh) 附近に比定してゐる。⁽²⁹⁾ その理由の詳細は知らないが、恐らくバルフが五世紀の後半以後エフタル民族の中心になつてゐた事実からこの民族に近い「ペルシア人の門」をバルフ附近に当てたものであらう。ササン朝のペーロ

ーズ (Perōz, 457—484) の時、ホラサンとエフタル領土との境に門を設け、互に相侵することなきを約した事実がタバリーに伝えられてゐるので (Th. Nöldeke, *Geschichte der Perser und Araber*, p. 98 ff.)、これもサン＝マルタンの比定の根拠になつてゐるのかも知れない。しかし、五世紀後半に活躍するエフタル民族と三世紀前半にスウレーンを収養したエフタル民族（仮にこれらをエフタル民族と解することが出来るとして）とが同一か否かは証明を要することであつて、これを同一とする前提の下に「ペルシア人の門」の位置を決定することは許されない。また、コラサンとエフタル民族の領土の境に立てられた門は、ペーローズがこれをエフタル民族の方面に押進めさせて進軍したとタバリーが伝へてゐるやうに、人工の門で、移動の可能のものであつた。しかし「ペルシア人の門」は、コーカサス山脈の中部にあつて、それ以北に住んだ諸民族と以南のジョルジア・アルメニアとの境をなしてゐた「アラン人の門」(Porte des Alains = Dar-i-Alan = Darial) と同様に、⁽³⁰⁾地理的・民族的な境界をなす自然の関門で、一地域から他に出る峠或ひは隘路を指してゐると見なければならぬが、バルフの西方にはかうした関門は嘗て存在したことがなかつた。今、イラン高原の周辺にこれに該当すると思はれるものを求めると、二つある。その一つはベルセポリスの西方、ザグロス山脈を越えてペルシア湾沿岸の平原に下る所にある「ペルシアの門」で、これはアケメネス王朝時代から名高い関門で、アレキサンダーの軍隊はこれを突破してベルセポリスを陥落させたのである。他の一つはいはゆる「カスピの門」(Caspian Gates) である。「カスピの門」は今のテヘランの東方、テヘランからフィールーズクー (Firuz Kuh) に到る街道上にあり、東径五二度一〇分の附近に位置する、山中の隘路である。それはエルブルズ山脈がその最高峰デマヴァンド山の所で南方に著しく突出してゐる部分と、更にその南方の山地群との中間にある、ほぼ東西に細長い谷間であつて、西のメディアと東のパルティアとの境界をなしてゐる。パルティアはこの東方に連らなるエルブルズ山脈の南麓一帯の地域である。

ところで、「ペルシア人の門」のペルシア人であるが、アルメニア史書ではペルシア人 (Parskî, Parsikî) とパルティア人 (Bartheu, Parteu) とは区別されてゐる。ペルシア人はペルシア即ちパルス地方の人で、アケメネス王朝及びササン朝の王族を中心とするこの地方の出身者をいひ、パルティア人はパルティア地方の人、即ちアルケサス王朝の一族とそれを中心とするこの地方の出身者を指してゐる。ペルシア人は更にパルティア以外のササン朝領土にゐる、ササン朝治下の住民の意味にも用ゐられる。ホレーンのモーゼのアルメニア史に、パルティアのアルサケスを称して、「ペルシア人とパルティア人の大王」(Mec ark'ay Parsic eu Parteuac) とつてゐるのは、その一例である (Moïse de Khorène, I, 8)⁽¹²⁾。かうした用例からすると、「ペルシアの門」も「カスピの門」も、ともに「ペルシア人の門」であるに適し。

「ペルシア人の門」がこれら二門の何れかであつたとすれば、エフタル人の王国はその方面にあり、チェン国も亦これから遠くない所にあつた筈であるけれども、これら何れの方面にもチェンと呼ばれた地域は見当らない。バルフとコラサンのメルヴ・アル・ルード (Merv al-Rūd) の中間にある Diuzdžân (≡ Gōzğân) 地方、その西方にあるテヂェン (Tediēn) 河流域、パルティアの北、アトレック (Atrek) 河の流域のヒルカニア (Hyrkania) 即ち Djūrdžân (≡ Gūrğân) 地方は、何れもヂェンに似た名をもつた所であるが、dj はペルシア語の s をアラビア語風に訛つたもので、いづれもアラビア文化流入以後出来た名であるばかりでなく、Diuzdžân, Djūrdžân はそれぞれアルメニア語では Gōzğân (Gōzğân), Vergan と呼ばれてゐたし、テヂェンの名が何時頃まで遡り得るのか、またこれがヂェンと略称されたことがあるか、更に三—四世紀前後にここに王国があつたかどうかは、全く明かでない。

しかし、ヂェン (Ċen, pl. Ćenk) はイラン高原の周辺にあつた国ではなかつた。それはアルメニア語で支那又は支那人を意味する名称で、支那は一に Ćenastān とも、「ヂェン人の国」ともいはれる⁽³²⁾。これが秦から出て支那の総称となつた

Čin, Cina に基づく名称であることはいふまでもない。⁽³³⁾ 支那の名は、漢代以来、中央アジアを通じて西アジアにも宣伝されてゐた筈であり、アルメニアの名が支那に知られたのは三国時代に遡り得るが、⁽³⁴⁾ アルメニアで支那の名が人々の注意を惹くやうになつたのは、四世紀後半かそれ以後のことであつたやうである。

ファウスツスによると、ローマの後援でアルメニア王となつたアルサケス王家のバブ (Bab, Pap, 370—374)⁽³⁵⁾ が、ササン朝と提携してローマに対抗しようとしたため、ローマの將軍トラヤヌス (Trajanus) のために殺され、ローマはアルサケス王家の一族であるヴァラズタッド (Varaztad) を王位に即けた。所がヴァラズタッドはアルメニアの貴族で、代々大將軍 (sparapet = generalissime)⁽³⁶⁾ を勤めて来たマミコニアン (Mamikonian) 家の家長で、バブの時からベルシアの侵入によつて分裂したアルメニアの再統一は軍功の多かつたムシエック (Muscheg) を殺した。そこで新たにマミコニアン家の家長となり、大將軍の職を嗣いだマヌエル (Manuel) はヴァラズタッドをローマ領に追放し、バブの皇后とその二子を王位に立て、自らアルメニアの実権を握つた。そしてヴァラズタッドが私生児でアルサケス王家の嫡統でないのに対しマミコニアン家はチェンの王族の出身で、チェンからアルメニアに移住して来たものであり、アルサケス王家と対等の地位にあることを強調して、そのアルメニア王となることの正当性を主張した (Faustus de Byzance, V, 32—37)。チェンのことが特にやかましく取上げられたのは、この際であつた。

ファウスツスには、先づバブがムシエックを讃へた言葉を記して、

(第五卷第四章) ムシエックは我等と同じやうに貴い種族 (race) の出である。彼の先祖は我等の先祖と同様である。何となれば、彼等〔ムシエックの先祖〕はチェン人の国 (le Pays des Djen) の王たる位置を捨ててアルメニアに來り、その生命を我等の祖先に捧げたばかりでなく、それを我等の祖先のために犠牲にした。 (Langlois, I, p. 283)

と言っている。ファウスツスにはまたマヌエルがヴァラズタッドを非難した言葉を載せて、

(第五卷三七章) 悠久の古から、我が種族はアルサケス朝のすべての王に忠節を尽して来た。我等は貴下方のために身を犠牲にした。我等は貴下方のためにのみ生きた。我等の先祖は貴下方のために戦闘で命を殞した。ムシエッグの父ヴァサグ(Vasag, Vasak)はアルサケス王(Le roi Arschag, 338—368)のために死んだ。しかるに、已んぬる哉、貴下方アルサケス王家の人々は、我等に報いる代りに、敵を免かれた(敵と戦つて生残つた)我等の種族の者共を滅ぼさせる。私の兄弟で、その幼年時代からその生活のすべてを貴下の一族に捧げ、貴下の敵を敗走させ粉碎し、その敵ですら殺すことの出来なかつた、勇敢なムシエッグを、汝は宴席において捕へて絞殺させた。更に汝はアルサケス家の一員でなく、私生児である。そのために、汝はアルサケス家に忠誠を尽した人々を認めようとしなかつた。我等について言ふと我等は皆て貴下の臣下であつたことはなく、貴下と対等で、貴下より一層貴い出身である。といふのは、我が先祖は昔チェン人の国に王であつたからである。所が兄弟間に起つた不和と血液の大いなる流失(「血を流す争の意か」の結果、我等は安住の地を求めることとなつた。その結果我等はここ「アルメニア」に來たのである。(略後) (Langlois, I, p. 299)と記し、更にこれに対するヴァラズタッドの回答を掲げて、汝はチェンの王族の出身で、アルメニア人ではなく外国人であると言つてゐるのであるから、汝こそチェンに帰れと言つたとしてゐる (Langlois, I, p. 299)。

これによると、アルメニアにおける最も有力な貴族であつたマミコニアン家は、もとチェンといふ国の王族の出身で、兄弟間の不和によつてその或る者がアルメニアに移住し、アルサケス王家に仕へて來たのである。この兄弟間の不和のことは、ファウスツスには具体的に書かれてゐないが、五世紀、某氏によつて著されたといはれる「聖グレゴリウス家の家系と聖ナルセーの生涯」(Généalogie de la famille de Saint Grégoire, Illuminateur de l'Arménie, et vie de Saint Nersès,

patriarche des Arméniens, par un auteur anonyme du Ve siècle) といふ書物の中に、同じくヴァラズタッドに対するマヌエルの言葉を記してゐる中に、

我等の先祖ヂェン人の王、即ち我等の祖父母達は、二人ともヂェン人の王であつた (Nos ancêtres les rois des Djen, qui sont nos aïeux, c'est-à-dire grands-parents, étaient fils tous deux du roi des Djen)。彼等は逃れてアルメニアの国に定住し「アルメニア」王から友人として名譽の待遇を受けた。兄はマム (Mam) と言ひ、次はゴン (Gon) と言ひ、二人の「子孫は」マミゴン (Mamigon) と呼ばれた。しかし、ヴァラズタッドよ、汝はアルサケス家の人ではなく、私生児である。もし汝が我が兄弟ムシェックの血を洗ふべく私の手にかかつて死にたくなければ、アルメニアの国から立去れ (Langlois, II, p. 43)。

とあり、マヌエルの祖父の時代にマミコニアン家はヂェンから逃れてアルメニアに移り、マムとゴンの名に因んでマミゴンと呼ばれたと述べてゐる。

ホレーンのモーゼのアルメニア史 (II, 81) には、

ササンの子アルダシールが死ぬと、シャープール (Shabovh = Shapur) がペルシア王位を嗣いだ。この王子の時に、マミコニアン種族の始祖 (l'auteur de la race des Mamigonian) がアルメニアに來た。それは高貴な王者の国 (pays) の北東の地方 (contrées)、すべての北方の地方の中で第一「の地方」から來たものである。私はこれ「について」の伝承を保存してゐるヂェン人の国 (pays des Djène) について語りたい。

と冒頭し、次の如く記してゐる。

アルダシールの死んだ年、アルボック=ヂェンバクル (Arbok Cēnbakur) なる者が現はれた。この名はその言葉で王

国の名譽といふ意味である。⁽⁴⁷⁾ このチェンバクルにはベグトック (Beghtokh) とマムグン (Mamgun) といふ乳兄弟があり、二人とも地方諸侯 (nakharab, nakhararm = satrap)⁽⁴⁸⁾ であった。ベグトックは絶えずマムグンを悪く言つたので、チェン人の王アルボックはマムグンを殺すことを命じた。これを知つて「マムグンは」王の召に応ぜず、その一党と逃れてペルシア王アルダシールの許に行つた。アルボックは使を出して引渡しを求めたが、アルダシールは拒絶した。そこでチェン人の王は彼に戦をしかける準備をした。しかし間もなくアルダシールが死んだので、シャープールが位に即いた。シャープールはマムグンをその君であり主人「であるアルボック」の手に渡さなかつたが、アリック (Arik = Iran) の土地に止ることを許さず、マムグンとその一党を外国人としてアルメニアの役人に引渡した。そしてチェン人の王の許に使をやつて、言はせた。^(略中) 地上に拡がつてゐる住民の中で、人の言ふ所では、チェンの住民は最も平和な国民であるので、チェン国民は平和な取極めをすることに賛成した。これによつて、チェン国民が真に平和の友であり、生命の友であることが明かである。

続いてチェンの国の状況を述べ、

この国は「平和であるばかりでなく」またあらゆる種類の果実がすばらしく豊富である。それは最も美しい植物によつて飾られてゐる。それは大量のサフランと沢山の孔雀と多量の絹を産する。そこには多くの boucserfs, 怪物, ânes-chèvres と呼ぶ動物がある。聞く所によると、人々の食料は雉子とか鵠とかのやうな、この国では求め「ても仲々得」られ「ず」少数の富裕な人々にのみ用ゐられてゐるものであるといふ。真珠や寶石は大家にはその数を知らないほど沢山ある。我が国では少数の人々に限られてゐる、すばらしくてよいと思はれる衣服は、彼の国では人々の普通の衣服である。以上がチェン人の国に關することである。

と記してゐる。モーゼはマムグンをアルメニア王ティリターテス (Tirdat) に仕へたとしてゐるが、マヌエルについては一言も触れず、バブ (Bab, Pap) がローマの支配から独立しようとしたため捕へられ、ヴァラズタッドがローマに擁立されたこと、ヴァラズタッドも亦在位四年でペルシア王シャーブルと同盟しようとして企図し、これを察知したローマ皇帝テオドシウスに喚ばれ、捕へられたこと、そしてローマの指令によつてバブの二子が位を嗣いだことを記してゐる (III, 50, 51)。

以上の如く、ファウスツス、「聖グレゴリウスの家系」、ホレーンのモーゼの三書に記されてゐるデエンに関する記事は、(A) アルメニアのマミコニアン家がデエンの王族の出身であることについては一致し、(B) マミコニアンに属するマヌエル及び彼がアルメニア王ヴァラズタッドを追放したことについては、モーゼに記事がなく、(C) マミコニアン家の先祖がアルメニアに移住した事情については、ファウスツスが単に兄弟の争ひから移住したといふのに対し、「聖グレゴリウスの家系」ではマムとゴンの兄弟が移つたとし、ホレーンのモーゼはマムグンがその兄ベグトックとデエン王アルボックのために逐はれたとし、最も詳細にそのアルメニアに來た事情と、デエン国の情況とを物語つてゐる。これらと比較すると、これら三つの記事は互に親子の關係にあるものではなく、マミコニアン家がデエンからの移住者であるといふ傳承を中核に、各々異つた所伝を記述し、ファウスツスよりは「聖グレゴリウス家の家系」の方が詳しく、更にそれよりはモーゼのアルメニア史の方が詳しくなつてゐることが判る。中でもモーゼのデエンはその王号、物産に富んでゐること、民衆の生活の豊かなこと、アルメニアの北東に位置してゐたといふことから、支那に関する相当に詳しい知識を反映してゐることが明かである。

またマミコニアン家の移住の年代について、ファウスツスは悠久の古とし、「聖グレゴリウスの家系」にはマヌエルの祖父の時代とし、ホレーンのモーゼはササン朝の第二代シャーブル (241—272) の初としてゐる。モーゼは更にマムグンが、アルメニアに侵入したシャーブルの軍と通じようとしたアルメニアの豪族セルクニ (Selkuni) 家を討つて、アルメニア王

ティリダーテス (252—330) を喜ばせたことを記してゐる (Moïse de Khorène, II, 84)。マヌエルはアルメニア王ヴァラズタッド (374—378?) の時代の人であるから、その祖父の時代と言へば四世紀初頭前後で、シャープールより若干後になる。かうした年代の相違は、要するに三者がその基づく所を異にしてゐるためであり、またマミコニアン家の移住の年代がはつきりしたるなかつた結果であらう。モーゼのいふマムグンが果して実在の人物であるか、そして三世紀の中頃に活躍したかどうか、他にこれを証拠立てるものはないが、三世紀における、マミコニアン家に属する人で実在のはつきりしてゐるのは、コスロー (217—238) とその次に立つて、アルメニアをキリスト教国にしたティリダーテス (252—330) の時に大將軍として活躍したヴァチエ (Vatché, Vaçé) (Fauste de Buzanta, III, 4; Langlois, I, p. 212, etc.) と、その父はアルダヴァズト (Ardavazt) と言つた。この大將軍についてはファウスツスに詳しい記事があるが、ファウスツスの記事の高い信憑性から考へて、ヴァチエが実在の人物であることは疑ひないであらう。マミコニアン家に属する人の存在はこれによつてコスローの時代にまで遡らせることが出来る。

ジェンの名が四世紀後半におけるマミコニアン家とアルサケス王家との対立を通じて俄かに人々の注意に上つたことは、ファウスツスの記事から窺ふことが出来るが、ホレーンのモーゼはこの対立について一言も触れるところがない。モーゼはマミコニアン王家がアルサケス王家に代つて一時政治の実権を握つたことを完全に黙殺してゐる。またバブ王に仕へて功勞の多かつたと伝へられるムシェックについても、僅かにアウアン (Atruan, Aghuan) 人の王ウルナイル (Urnair) を討つたことを記すのみであり (III, 37)、バブの父アルサケスに仕へてアルメニアの軍制改革に非常な功績のあつたヴァサウ (Vasagh, Vasat) についても、僅かにその名を挙げるに止つてゐる (III, 37)。これはファウスツスがマミコニアン家に属する人々の活動を詳しく記述してゐるのと頗る対蹠的であつて、モーゼが故意にマミコニアン家の勲績を過小に伝へようとし

てゐることを示すものかも知れない。⁽³⁹⁾しかし、モーゼはマミコニアン家の出身地ヂェンについては、その盛国なることを口を極めて讚美してゐるのであるから、マミコニアン家がヂェンから移住したことは、寧ろ名譽のことどころであれ、蔑しむべきことと考へられてはゐなかつたと思はれる。

ヂェンが人々の注意に上つたのには、もう一つの理由があつた。それはヂェンのことが四―五世紀に西アジアやローマ帝国に俄かに知られるやうになつたことである。それは主としてササン朝ペルシアと北魏以下南北朝の諸国との盛な通交によるものであるが、これに先立つ晉室の南遷、五胡十六国の迭立といふ東亜の大變動が西方にも知られた結果であらう。モーゼに記す Cēnbakur (∨ Cēnbaghpnr) の Cēn はアルメニア語であるが、bakur は中世イラン語の転訛である所を見ると、モーゼのヂェン國の記事はペルシアを経て伝へられた知識であると思はれる。(H. H. Schaeder, Eine Verkannte aramäische Präposition, OLZ, 41 (1938), p. 598 にある) baghpūr は本来大月氏語で天子を訳したもので、それが大月氏によつて東部イランに伝へられたものであるといふが、如何がであらうか。いづれにしてもこの語は中世イラン語として行はれてゐた筈である。

四世紀の人アミアヌス・マルケリヌス (Ammianus Marcellinus, XXIII, 6, 60, 64, 67) にセレス (Seres) 人の國について、それが高い城壁で囲まれ、面積が広く富んでゐること、黄河と揚子江 (Oechartis et Bautis) とがやや緩かに流れてゐること、土地には穀物・家畜・果樹園が満溢してゐること、都市は多くはないが富み榮え、美しくてよく知られ、生活は平和で、互に迷惑になるやうなことをせず、氣候は快適で健康であること、或る種の樹木から絹を製造することなどを記してゐる。⁽⁴⁰⁾アミアヌスは三三〇年に生まれ、その著述の記事は三九一年に及んでゐる。⁽⁴¹⁾そのセレス人に関する記事はプロトレマイオスの記事を採つてゐる所もあるが、右に掲げたのは大体彼自身が当時採集した情報であると思はれる。

マミコニアン家の出身地をデェンとする説は、恐らく四―五世紀に支那の名が西アジアに伝播した結果出来たものであらう。天子を中世ペルシア語で *baghpur* (*faghfur*) と訳するのが何時から始まったか明らかでない。八五一年の著作といはれる「支那・インドの旅記」(*Ahbâr as-Sîn wal-Hind*) に見えるものが比較的古い⁽⁴²⁾が、モーゼのアルメニア史が五世紀の著作であるとすれば、恐らくこれが最も古い用例であるかも知れない。或ひはその早過ぎることを怪しむ人があるかと思はれるが、同じ天子を訳した *devaputra* の称が、初期クシャン朝の王クジュラカドフィセス (*Kujula Kadphises*) の貨幣に既に用ゐられてゐるのを見ると、そのペルシア語訳が五世紀にあつたとしても必ずしも不思議ではあるまい。

そこでもとに戻つて、スウレーンがデェンに移り、その支配者になつたといふ話について考へてみる。スウレーンの父アナグはバルティア帝国時代から榮えてゐたスウレーン家 (*Suren Pahlav*) に属してゐた (*Moïse de Khorene*, II, 91)。これはマミコニアン家とは異り、アルサケスの子孫であつた (*Ibid.*, II, 68)。そしてアナグの子スウレーンがデェンの支配者となつたといふ話は、バルダサネスに仮託されてゐるデェン人王国史とそれを参考したゼノブの書に伝へられてゐるのみである。アガタンゲロスにはアルメニア語・ギリシア語・アラビア語の三つのヴァージョンが現在してゐるが、そのアルメニア語訳本にアナグの二子がギリシア (ローマ領) とペルシアとにつれて行かれたとのみ記されてゐることは、前に引いた通りであり、ギリシア語訳本も全くこれに同じである (*Langlois*, I, p. 121)。(アラビア語訳本は参照することが出来なかつた) 即ち、デェン人の国については、これをマミコニアン家の先祖に結びつける所伝と、これをアナグの子スウレーンに關係づける所伝とがあり、両者は全く別々の伝へとして記録されてゐるのである。そしてデェンの名がアルメニアの人々の関心を特に惹いたのが四―五世紀、早くてもバブの時代即ち三七〇年以後であるとすると、デェンとスウレーンとの関連づけもそれ以後のことではなければならない。

このやうに考察すると、スウレーンのチェン王国支配の前提として語られてゐる、彼がエフタル王国で養はれたといふ話も、やはりチェン王国とスウレーンが結びつけられた時に作られたもので、それが三七〇年代以後の或る時期であるとする、このエフタルは五世紀の中頃に中央アジアに抬頭したエフタル民族のこととするのが最も妥当である。アルメニア史料にエフタル民族のことが確実にこの名で出てくるのは、パルペのラザーラの「アルメニア史」が最初である (Langlois, II, p. 344, 349—351)。それはササン朝のペーローズ (Pērōz, 457—484) がエフタルと戦つて敗死した次第を記したもので、*シニャップ* (The Chronicle of Joshua the Stylite, ed. W. Wright, Cambridge 1882, p. 8—9)・*プロコピウス* (Procopius, ed. H. B. Dewing [Loeb Classical Library], I, iii, 1 ff.)・*タビリー* (Nöldeke, Geschichte d. Perser u. Araber, p. 118 ff.) 等に伝へられてゐる所と相応するものである。ペーローズとエフタルとの戦が何時から始まつたか。それは明かでない。シニャップはペーローズが三回戦ひ、その都度捕へられ、三回目に敗死したと記し、プロコピウスは二回、タバリーに記録されてゐる三つの所伝にはそれぞれ一回、ラザーラにも一回と記されてゐる。いづれにしてもササン朝は五世紀の後半に始めてエフタル民族に接触し、アルメニア・シリア・東ローマの記録にもその迹を止めるほどの惨敗を喫したのである。

エフタルはバクトリア方面のクシヤン民族を征服して、史上にその姿を現はすのであるが、その征服は四五〇年代の末であつた。五世紀のエキシエーの「ヴァルタン (將軍) とアルメニア人との戦争の歴史」には、エフタルに征服される直前のクシヤン民族の動勢に関する貴重な記録を伝へてゐる。エキシエーは先づ、ササン朝のヤズデゲルド二世 (Yazdegerd II, 438—457) にゾロアスター教の司祭 (*les mages*) が、*クテシフォン*で王に告げた言葉を記し、

軍を興し、兵を集め、クシヤン人の国に進み、全人民を結集し、諸門⁽⁴⁾の彼方に居を定めよ。彼等を悉く屈服し、遠くし

て不親切な国々に閉込めた時、汝の計画と望みとは完成されるであらう。そして、我等が我等の宗教を彼等に知らせる如く、汝はまたクシヤン人の国に君臨し、ギリシア人は汝の力に反抗しないであらう。(Langlois, II, p. 185)

と言ひ、この勧告を容れて治下の諸国に発せられたヤズデゲルトの動員令を掲げた中に、

我等は東方の諸国に入り、神の加護によつてクシヤン人の帝国を再征服する公式の計画を立てた。この命令を受取り次第、遲滞なく騎兵を集め、アバル州 (province d'Abar) に来て我に追ひつけ。(Langlois, I, p. 185)

と記してゐる。この命令を受けて諸国の兵が集つたので、

突然彼「ヤズデゲルト」はクシヤン人とも呼ばれるフン人の国 (pays des Huns) に侵入し、二年間戦つたが、これを征服することは出来なかつた。(Langlois, II, p. 186)

といふ。アバルはニシャプール (Nishapur) で、イラン高原の東方辺に位置し、イランからコラサン地方に出る要地である。ここからの進撃を受けたクシヤン人の国は、明らかにバクトリア地方に当る。このクシヤン人の国への進出は、エキシエーによると、ヤズデゲルト (438—457) の即位の一—四年の間のことであつた。⁽⁴⁶⁾ このクシヤンは恐らくキダーラと呼ばれたクシヤン民族で、それはカニシカ王によつて代表されるクシヤン帝国がササン朝の勃興によつて崩壊した後、キダーラによつて再統一されたものである。⁽⁴⁶⁾ キダーラはエフタルの抬頭によつて西遷を餘儀なくせられるが、プリスクスの伝える所で四五六年ペルシア(ササン朝)は「キダーラのフン族」といふ民族と戦つてゐたといふ (Fragmenta Historicorum Graecorum, IV, p. 102, Frag. 25)。エキシエーの「フン族とも呼ばれるクシヤン人」が、プリスクスのキダーラのフン族に当ることは、地域と年代との近いことと、それがともにフンとも呼ばれたことから誤らないであらう。サン・マルタンはヤズデゲルトと戦つたこれらのフン(クシヤン及びキダーラ)をコーカサス山脈の北に置いた。マルクワルトはこれを斥けて、

カスピ海の東南岸地方グルガン (Gurgān) の北方、Çöl といはれる地域の民族に当ててゐる。⁽⁴⁷⁾ しかし、エキシェーには、マギの長がキリスト教が次第に広範囲に伝はつて行くことを憂へた言葉を記した中に、

嘗て聞いたところによると、^(中略) 彼「ペルシア王シャープール」が「キリスト教の行はれるのを」防がうとすればするほど、それは拡がつた。それ「キリスト教」は大きくなり、クシヤン人の国にまで入り、そこから南の諸地方に伝はり、インド人にまで及んだ。(Langlois, II, p. 202)

とあるので、これらのクシヤン人の国がバクトリア又はガンダーラ地方に当ることは明かである。

エキシェーは、ヤズデゲルド王がその即位の十二年(四四九—四五〇)に Idaghagan (Itāghagan) にまで進撃したので、その軍容に恐れをなしたクシヤン人は敢へて戦う勇氣を失つたと記してゐる (Langlois, II, p. 188)。ラングロアはこの Idaghagan をエフタルではあるまいかと疑つてゐるが、それはマルクワルトが既に指摘してゐるやうに、バルフとメルヴ⁽⁴⁸⁾ アル⁽⁴⁸⁾ ルードとの中間にあるターラカーン (Tālākān) のことで、エフタルには關係がない。

このやうに、四五三—四五四乃至四五六六年までバクトリア・コラサン方面のクシヤン民族がササン朝と戦つてゐたことが記録されてゐるが、同じ頃エフタルの名が始めて記録に現はれる。それは太安二年十一月(四五六年十二月十四日—四五七年一月十二日)にエフタルの朝貢使の到着したことを示す、魏書本記^(五)の記載である。エフタルは恐らく四五六年の末にクシヤン民族を征服してアフガニスタン北半に根拠を構へたのである。そしてそれから更に西に勢力を發展させてササン朝と衝突することになった。この結果、ペーローズ治下のペルシア軍は惨敗し、王は敗死し(四八四)、ササン朝は一時その制圧下に置かれるに至つた。エフタルが真に恐るべき敵として認識されるのは、この時からである。スウレーンがエフタルに結びつけられたのは、必ずこの後のことに違ひない。

スウレーンがエフタルに結びつけられたのは、ササン朝の侵入と圧政とに苦しみ続け、四二九年には遂にアルメニアの王位をすら失ったアルサケス王家が、ササン朝を圧倒するエフタルと血縁関係のあることを示して、王家の歴史に栄光と權威を加へようとしたためであらう。エフタル民族はアム河上流域の方面から次第にアフガン・ヒトルキスタン（アム河以南のアフガニスタン北部）に進出して来たもので、アルサケス王家、或ひはアナグの属したスウレーン家と関係のあつた痕迹はない。アナグの妹がエフタル王デ・エヴァンシル（又はその子ディラン）の妃とされたり、アナグの子スウレーンがアルメニアを脱出してエフタル王国に身を寄せたといふ話は、エフタル民族とアルサケス王家とを関係づけるために創作されたものとして誤ないであらう。

スウレーンがこの話の主人公として選ばれたのは、彼については単にペルシアにつれて行かれたとする所伝があるのみで（アガタンゲロス）、詳しいことが何も伝つてゐなかつたために、架空の話をつけるのに都合がよかつたためであらう。また、スウレーンの兄グレゴリウスはアルメニアにキリスト教を拡めた功勞者として、あらゆる光榮と名譽とを与へられ、いくつかの聖者伝が公にされた。その弟であるスウレーンにも、これに見合ふ榮譽と事蹟があつてよい筈である。「エフタル人王国史」とか「チエン人王国史」とかは、恐らくスウレーンその人の伝記といふべきものであつて、それはグレゴリウスの伝記が纏つた形で世に行はれるやうになつてから後に作られたものと想像される。四五六年（グートシユミット説）今の形に整へられたといはれるアガタンゲロスの「ティリダーテスの治世と聖グレゴリウスの予言との歴史」は、要するに聖グレゴリウス伝であつて、同類の伝記の中でも、最も古いものの一つであらう。スウレーンに関する説話は恐らくその後の製作で、スウレーンをチエン即ち支那の支配者としたのも、グレゴリウスの弟としての彼の位置を高からしめる意図から出たものであらう。

エフタル民族とアルサケス王家とを結びつけようとする試みは、他にも見られる。七世紀のアルメニアの司教セペーオス (Sebeos) の「ヘラクリウス帝史」⁽⁴⁹⁾の巻頭に序説として、アガタンゲロスによつたといふ、アルメニア人の起源からアルサケス王家によるパルティア及びアルメニア支配の歴史の概説があり、バブ王 (369—374) にまで及んでゐる。アガタンゲロスはティリダーテス (322—330) の書記であつたので、バブ王の治世の末にまで及んでゐるこの概説が、アガタンゲロスの名に托した後人の著作であることは明かである。以下これを偽アガタンゲロスと呼ぶが、これに次のやうな記事がある。

マケドニア人の王アレキサンダーの死後、パルティア人は六十一年間マケドニア人に服従してゐた。この間、バビロニアではニカノル (Nicanor) 「セレウクスニカトル」が三十八年、アンティオクスニソテル (Antiochus Soter) が十九年、アンティオクスニテウス (Antiochus Théus) が十年治めた。

アンティオクスの十一年、パルティア人は叛乱を起し、マケドニア人の支配を脱した。アルサケス大王は、クシヤン (Kou-schan) 人の国の Pahl-Schahasdán に (住んでゐた) テタル人 (Thétaliens) の王の息子であるが、権力を握り、東方と北方のすべての人々はその支配に従つた。(Langlois, I, p. 198)

この記事でアレキサンダーの死後六十一年間といふのは、セレウクスニカトルからアンティオクスの第十一年までの年数の総計である筈であるが、挙つてゐる数字の合計は六十七年であつて一致しない。これはセレウクスニカトルの治世を三十二年とすべき所を三十八年としたためである。そのことは、ホレーンのモーゼの次の記事に比較すると明白になる。

「アレクサンダーの死」後、セレウクスはバビロニアに君臨して共同分割者の国々を奪つた。彼は武力によつてパルティア人を征服し、そのためにニカトル (Nicator, Nikanor) と呼ばれた。セレウクスは三十一年支配した後、王位をその子アンティオクスに遺し、アンティオクスはソテル (Soter, Sauter) と呼ばれ、十九年君臨した。テウス (Théus,

Thesus) と言はれたアンティオクスが、十年の間、これを嗣いだ。ところがその治世の十一年目にバルティア人はマケドニア人の支配を斥け、その結果、王位はアブラハムの種族である勇敢なアルサケス (Archag) に伝つた。(略下) (Moïse de Khorène, II, 1; cf. II, 68)

これによるとアレキサンダーの死後、アンティオクスの十一年までは正に六十一年である。モーゼはこれに続けて、

前述の如く、アレキサンダーの死後六十年で、勇敢なアルサケスが、クシャン (K'ušan) 人の国の Pahl-Aravadin (Pahgh Aravadin) と呼ばれる町で、バルティア人を支配するのが見られる。(Moïse de Khorène, II, 2)

と記してゐる。モーゼが五世紀の人であるとすると、偽アガタングロスは、七世紀の人セベオスに引かれてゐること、更に偽アガタングロスの方がモーゼより詳しくなつてゐることから考へて、モーゼをもとにしてこれに若干の新記事をつけ加へたものであることが知られる。即ち、アルサケスをクシャン人の国の Pahl-Schahastan に住したテタル人の王の息子とするのは、偽アガタングロスの加へた追記で、恐らくモーゼ以後に成立した所伝であらう。偽アガタングロスには、更に

その父アルサケスの後、クシャン人の土地 (la terre des Couschans) の Pahl-Schahastan で支配したバルティア人の王子は次の如くである。伝へられる所では、バルティア人の王アルサケスには四人の子があり、第一子はテタル (Thé-taliens) 人の国において、第二子はキリキア人 (les Ciliciens) に、第三子はバルティア人に、第四子はアルメニアの国に、それぞれ君臨したといふ。アルサケスは百三十年生き、五十六年位にあつた。彼の後、その息子のアルサケス〔二世〕は Pahl-Schahastan において七十年間バルティア人に君臨した。(略下) (Langlois, I, p. 199)

と記してゐる。アルサケス二世はバルティア人に君臨したといふのであるから、父アルサケスの第三子であつたことになるが、第一子の治めたテタル人は、前の記事のテタル人と同じものに相違ない。即ち、偽アガタングロスにはテタル人がアル

サクスとその父及び子の支配した民族であることを繰返し述べてゐるのである。

Schahsadan はアルメニア語で王の国 (pays ou contrée) の意であるから、⁽⁵⁸⁾ Pahl-Schahsadan は Pahl といふ王領土の意になるであらう。モーゼにはこれを Pahl-Aravadin と記してゐるが、Aravadin の意味は明かでない。このパフルはクシヤン人の国にあつたといふのであるから、それがクシヤン帝国の中心であつたバルフ (Balkh) であることは明かである。しかもモーゼにも、偽アガタンゲロスにも、これがアルサクス王家のバルティア人支配の中心であつたやうに書いてある。これはアルサクス王家がその始めからクシヤン民族と深い関係をもつてゐることを示さうとしたものであるが、これについては次章で別に考へることにする。

テタル人 (Thétaliens) は、マルクワルトの引用する原本に従ふと、T'etalk' (T'etal の複数形) とあり、マルクワルトはこれをエフタルを指すペルシア語 *Hetal から転じた、コーカサス語形 *t-Hetal (t は接頭語) と解してゐる。⁽⁵⁹⁾ しかし、先づペルシア語 *Hetal をかう読むのが正しいかどうかが問題で、これは Haital とも読めるし、Hebtal (Hibtal) の誤写であるとも言へる。また T'etal (Thetal) の t を接頭語と解さなくても、印欧語における th と ph, f, (h) との対応関係を考慮すれば、⁽⁶⁰⁾ T'etal が *P'etal, *F'etal, *Hetal となり得ることは容易に考へられる。またアラビア語でエフタルを Haital (pl. Hayātīla) といふのを併せ考へると、T'etal (*Hetal) はアラビア語の影響によつて生じた語形と見てよいであらう。前述の如く、偽アガタンゲロスの記事がモーゼ以後、即ちエフタル民族がバルフ方面に大いに活躍してゐた時代か、或ひはそれ以後に成立したと推定されることは、その T'etal をエフタルに比定することを一層確かにするであらう。偽アガタンゲロスはスウレーンのことは勿論、グレゴリウスのことすら触れてゐない。従つてアルサクスをテタル人即ちエフタル人に結びつける所伝は、スウレーンをエフタルに関連させる所伝とは別系統のものであらう。しかしそれがエフタル

の出身であることによつてアルサケス王家を強化し美化しようとする意図に出てゐる点では、スウレーンの所伝と同じであつたと考へられる。

四 アルサケス王家とクシャン民族

アルサケス王家を東方の有力民族に結びつけ、その光輝ある伝統を誇り、ローマやササン朝に拮抗させようとする動きは、実はエフタル勃興以前からあつた。それはクシャン民族をアルサケス王朝に結びつけたことである。クシャン民族は紀元前後から抬頭する民族で、アルサケス王朝と血縁関係のあつた証迹はない。しかるにホレーンのモーゼはアルサケス王家がクシャン民族の出身で、クシャン民族の住地に中心を設けてパルティア帝国を支配したことを繰返し述べてゐる。

モーゼはアルメニア王コスローがササン朝のアルダシールに復讐するためにその故郷に使者を送つて一族に來援を求めたことを述べて、次のやうに言つてゐる。

前述の如く、ヴァガラシュ (Vagharach) 「二世」を嗣いで王位についたのは、その息子で、聖ティリダーテス大王の父であるコスローである。ティリダーテスの練達の祕書アガタングロスは、コスローとその親属のことについてざつと述べた後、ペルシア人の王アルダヴァンの死、ササンの子アルダシールによるパルティア人の王国の滅亡、アルダシールの力の下にペルシア人が屈服されたこと、ティリダーテスの父コスローによつて行はれた復讐、ペルシア人及びアシリア人の国「イラン高原とメソポタミア」を荒廢させた「コスローの」侵略について簡単に述べてゐる。この歴史家「アガタングロス」のいふ所によると、その後、コスローはその母国に、「即ち」クシャン人の諸国に、使を送つて、その親属に來て彼を助け、アルダシールに抵抗することを懇請した。しかし彼等は、アガタングロスのつけ加へてゐる所

によると、彼の提案に耳を傾けなかつた。それは彼等が彼等の親縁者即ち彼等の兄弟の支配の下に暮らすよりも、アルダシールの支配の下で暮らすことを好んだからである。しかるにコスローは、彼等〔の援助〕なくして、その欲する所の復讐を行つた。かくして十年に亘つて、絶えず侵略を新たにしながら「ササン朝治下の」全土を窮境に陥れた。

(Moise de Khorène, II, 67)

これによると、クシャーン人の国はコスローの母国であり、従つてアルサケス王家の母国であつたのである。モーゼは更にこれに續けて、

アガタンゲロスは續いてアナグがアルダシールの謀略にひかれ、次のやうな約束に誘はれて来たことを述べてゐる。「私は貴下に貴下の貴い世襲財産 (apanage héréditaire) バフラウ (Bahlav, Pahlav) を返さう。私は貴下の額を王冠で飾らう。」その結果、アナグは同意し、コスローを殺す。(Moise de Khorène, II, 67)

「貴下の貴い世襲財産 Bahlav (Pahlav)」は、原文には

patukan zier sephakan Pahlavn (貴い、貴下の、sephakan [さへん] Pahlav)

とあり、sephakan は sepuh (王子) から出た形容詞で、それは君主の命令によつて何時でも取上げられ得る封土ではなく、子孫孫に伝へることを認められた自由保有地乃至は永代私有地 (allodium) を意味してゐる。⁽⁶³⁾ Pahlav は従つてアナグの家が代々所有してゐた私有地であつたが、(アルダシールによつて取上げられたのを)、再び返還しようといふのである。

現行のアガタンゲロス (Langlois, I, p. 114 ff) には正しくこれに当る記事があり、モーゼはその要領を述べてゐることが判るが、しかし使節の派遣に関する重要な相違がある。この部分を現行のアガタンゲロスは次のやうに述べてゐる。

彼〔コスロー〕はペルシア人が彼の親族を見捨てて Sdahr [Istakhr] の人、即ちササン朝のアルダシール〕の新しい支

配に臣属したといふ報知に非常に心を痛めたので、同じく一使をこれらの親族に派遣して、戦鬪的な民衆とクシャン人の勇敢な兵士その他、及び彼等自身の臣下とともに集ることを「求めた」。しかし、彼の親族、諸氏族の長、パルティア人の有力者達は、耳を傾けなかつた。それは彼等が既にアルタシールに服従し、彼等の同国人であり彼等の親縁者（即ちコスロー）の〔臣下〕となるよりは、アルタシールの臣下となることで満足してゐたからである。（Langlois, I, p. 117）即ち現行のアガタンゲロスでは、コスローはその一族に使を出してクシャンの兵士をも集めて来援することを求めてゐるのであつて、一族がクシャン人の国にゐたとも、況んやクシャン人の国がアルサケス王家の母国であるとも書いてゐないのである。そして細かく検討すると、これはモーゼがアガタンゲロスの記事を改訂し、アルサケス王朝とクシャン人との關係を特に強調しようとしたものであることが知られる。

先づモーゼは右に引いた記事の末に

アガタンゲロスがこの話の概略を伝へてはゐるが、私はこの時代の歴史をもつと広く、もつと詳しく、事の起りから始めて全くの眞実の言葉で述べることを決心した。

と言ひ、章を改めてアルサケス王朝の發祥から、アルサケスの子孫がいくつかの民族に分れたこと、パルティア帝国がササン朝に滅されたこと、コスローがこれに復讐したこと、しかもアルサケスの子孫の或る者は他の民族との不和からササン朝に服従したこと、アナグのコスロー暗殺、聖グレゴリウスの出生等について述べてゐる。そしてその中でアルサケスとクシャン人との關係を説明して、次のやうに言つてゐる。

パルティア人はアブラハムが東方に遣したエムラン（Emuran）とその兄弟の後である。勇者アルサケスはパルティア人の中から出、マケドニア人の制約を斥け、クシャン人の地に三十一年君臨した。（中）〔その孫〕アルサケス大王はアン

ティオクスを殺し、弟ヴァウルシャック (Vagharschag) を「パルティア帝国の」副帝に任命してアルメニア王とした。アルサケス「大王」はパフル (Pahl, Bahl) に行き、五十三年間帝位にあつた。このために彼の子孫はパフラヴ (Pahlav) と呼ばれる。同様に、その弟ヴァウルシャックの子孫はその先祖の名に因んで、Arschaguni (Aršakunik) と呼ばれる。(Moïse de Khorène, II, 68)

このことはモーゼの別の章にも繰返されてゐる。それは前にも引用した次の記事である。

前述の如く、アレキサンダーの死後六十年で、勇敢なアルサケスが、クシヤン人の国の Pahl Aravadin [Pahl Aravadin] と呼ばれる町で、パルティア人を支配するのが見られる。(Moïse de Khorène, II, 2)

これはモーゼがマルシアパスリカティナ (Mar Apas Catina) の史書から抜いたものであると云ふ (Langlois, I, p. 42)。モーゼによると、カティナはアルサケスの子で、アルサケス王家出の初代アルメニア王と言はれるヴァウルシャックと同時代の人であるといふから (Langlois, I, p. 8)、紀元前二世紀の中頃に活動したことになるが、クシヤン民族の活躍はそれから百四、五十年後のことであるから、クシヤンやパフルのことに言及してゐるこの記事が、そんな古いものであり得ないことは甚だ明かである。モーゼの引いてゐる所によると、カティナの書にはヴァウルシャックの子アルサケスのことまでが記されてゐた (II, 9)。しかしアルサケス王朝がアルメニアに君臨するのは、紀元五三、四年のことで、紀元前二世紀からそこに支配が及んでゐたというのは、年代の繰上げに過ぎない。従つてカティナの書なるものも、早くて紀元一世紀の後半でなければ書かれなかつたものである。いづれにしても、モーゼがこれを引用してゐたことは確かであるから、その成立がモーゼ以前にあつたことは誤ないであらう。モーゼがアルサケスの都した所を他 (II, 68) では単に Pahl としてゐるのに、ここでは Pahl Aravadin としてゐるのは、後者がカティナに本づいてゐるからであらう。このやうに考察すると、モーゼ

の時代、或ひはそれに先立つ或る時期からアルサケスとクシャーン人の国とを結びつける伝承が存在してゐたのである。そしてモーゼはこの伝承を採用し、これを強調したのである。

モーゼはまた、

コスローは〔ローマ皇帝フィリップスの救援を得たほか〕、新にパルティア (Part'eu) 族とバフラヴ (Pahlavik) 族の親族と同盟者、及びクシャーン人の国の全軍隊に勸めて、アルダシールに復讐するために来ることを求め、その中から適任の人を〔パルティアの〕王にし、王位の失はれることを避けると約束した。(Moïse de Khorène, II, 72)

とも記してゐる。モーゼによれば、クシャーン人はアルサケス王家の支持者の代表であつたのである。モーゼはまた、コスロー暗殺の褒賞として

アルダシールは彼等〔パルティア人の地方軍司令官〕にバフラヴ (Bahlav) と呼ばれる彼等の旧領土 (ancien domaine) と、王都バフル (la ville royale Pahl) とクシャーン人 (Couchans, K'ušan) の国のすべてを返すことを約束した。(Moïse de Khorène, II, 74)

と記してゐる。「旧領土」に当る原語は

zeun tunn

で、tunn (tun) は一領主の支配する領土を意味してゐる。⁽⁵⁴⁾これによると、バフラヴはアナグの属する家の所有地ではなく、パルティア人 (即ちアルサケス王家とその協力者) が支配してゐた領土であるが、これまでに引いたモーゼの記述 (II, 68, 74) から考へると、バフラヴの都がバフルで、バフラヴは同時にクシャーン人の国でもあつたのである。この記事を、モーゼがアガタンゲロスの記事を要約した中に、アルダシールがアナグに

貴下に貴下の貴い世襲財産 (sephakan) パフラヴを返さう。そして貴下の額を王冠で飾らう。(Moïse de Khorène, II, 67)

と約束したと記してゐるのに比較すると、少くとも「クシヤン人の国のすべてを返すことを約束した」といふ部分がモーゼによる加筆であることが判明する。モーゼが如何にアルサケス王朝がその初期からクシヤン人と密接な關係にあつたかを強調しようとしてゐるかは、これによつても知られるであらう。しかし、それはホレーンのモーゼの主観の中に形造られてゐた關係であつて、歴史の實際が物語つてゐる客觀的事実ではない。

パフルはバクトリアのバルフ (Balkh) のことである。パフルを中心をもつクシヤン人とはカニシカ王で名高いクシヤン民族のことである。しかし、クシヤン民族が史上に姿を現はすのは、紀元前後のことであつて、アルサケス王朝の出現に遅れること二百五十年に近い。クシヤン民族はその後少くとも第七世紀頃までこの名で存在することが知られてゐるから、二四—二二九年まで続いたバルティアのアルサケス王朝と二百二、三十年に亘つて併存してゐたのである。従つてその間に何等かの親縁乃至は統屬關係が成立した可能性はあるが、アルサケスがクシヤン人の国のパフルにその最初の都を置いたといふ所伝は、ホレーンのモーゼのアルメニア史とその材料の一つになつたアルニアパスニカティナの書以外には見えてゐない。アルサケス王朝の興起の事情については、アポロドロス (Apollodoros) ・ストラボン (Strabon) ・トロウグス＝ポンペイウス (Trogus Pompeius) ・ユスティヌス (M. J. Justinus) の所伝とシンセル (Syncelle) ・アリアノス (Arianos) ・ゾシモス (Zosimos) との二系列がある。前者はアルサケスをカスピ海とアラル海の間にある遊牧民ダハエリバルニ (Dahae-Parni) 族の出身で、セレウクス王朝治下のイランの動揺に乗じてバルティア地方に侵入し、その軍政長官 (satrap) アンドラゴラス (Andragoras) と戦ひ、遂にバルティアを占拠し、次第に領域を拡大してバルティア帝国を建設したとする。

後者はアルサケスはその弟ティリダーテス (Tridates) とともにセレウクス王朝治下のバクトリア州の軍政長官で、それがバクトリアにおいて叛乱を起し、それからパルティアに移つたもので、アルサケスはパルティアを支配すること二年にして死し、ティリダーテスが實際の国の建設者であつたものとするものである。(前者にはティリダーテスの名は出て来ない。)

ストラボンにはまたアルサケスがバクトリアの人で、バクトリア王国の建設者ディオドーツス (Diodotus) の勢力が次第に増大して行くのを見て、パルティア人を語らつて叛乱を起したといふ伝へのあることを記してゐる。これら三様の所伝を如何に解釈するかについて、学者の間に説が分かれてゐるが、史料の系統・年代・内容から言つて、ストラボン・ユスティヌスの系統の第一の所伝が最も信頼すべきもので、アルサケスこそ名実共にパルティア帝国の創建者であり、それはセレウクス王朝領土の外部からパルティアに侵入したもので、その治世は前二四七年から二一〇乃至二〇九年に及ぶ三十七、八年に亘るものであり、ティリダーテスは非實在の人物であつたと見るのが、最も妥当であると考へられてゐる。これについてはポーランドのウォルスキ (Józef Wolski) 氏に精密を極めた一聯の研究があるので、⁽⁵⁶⁾詳細はそれに譲るが、ウォルスキ氏や英国のターン (W. Tarn) 氏の研究によると、アリアノス等の所伝は三世紀中頃に成立したもので、それにはアルサケス、ティリダーテスをアケメネス王朝のアルタクセルセス二世 (Artaxerxes II) の子孫としてゐるが、それは当時ローマと争つてゐたパルティアが、嘗てアケメネス王朝領であつたアジアの地域の領有の正当性を主張するために捏造されたのであらうといふ。⁽⁵⁷⁾またアルサケスをバクトリアの人とする伝へは、最近ではアルトハイム (F. Altheim) 氏によつて採用されてゐるが、氏は何故に同じストラボンに伝へられるアルサケスをタハエルパルニ族出身の侵入者とする所伝を斥けて、この一説のみを正しいと見てゐるのかを説明してゐない。⁽⁵⁸⁾しかもこの伝へは、アルサケスの抬頭とディオドーツスの勢力拡大の相関關係を伝へてゐるだけのこと、到底事実とは考へられないといふ。

このやうに、アルサケスはセレウクス王朝領の域外、カスピ海・アラル海中間のオコス (Ochos) 河方面からパルティアに侵入したものである。ストラボン (XI, 9, 3) によると、アルサケス王朝はスキタイ人を強制したり、バクトリア王国のユウクラティデス (Eucratides) を讓歩させてバクトリアの一部を占領したといふが、これはアルサケスより後の時代のことである。しかも占領した地域はバクトリアの西部地方で、バクトリアの中心バルフ即ちアルメニア史料のパフルは、始めからアルサケス王朝の勢力圏外にあつたとしか考へられない。ストラボンは紀元前六四年から紀元二一年以後の或る時期まで栄え、その時期は宛かもクシヤン王朝出現の頃に當つてゐるが、その記述にはクシヤン王朝或ひはそれに該当する民族のことは出て来ない。(欧米の學者にはクシヤン人と大月氏とを同一視し、これをトハラ人に當てる人が多いが、私は従ふことが出来ない。) このやうに、アルサケスその人は本来バクトリア地方とは關係がなかつたのであつて、これを本来クシヤン民族と關係があつたと見ることは困難である。

しかるに、ホレーンのモーゼが力をこめてアルサケスがクシヤン人の国に先づ君臨したといつてゐるのは、何故であらうか。そこには特別の意図乃至は理由がなくてはならない。私はこれは四二九年にアルメニアのアルサケス王家がササン朝のために完全に主權を奪はれた情勢に対し、クシヤン民族との歴史的因縁を強調し、その協力によつてアルサケス王朝の勢威の回復を図らうとした、政治的宣伝工作に他ならないと考へる。五世紀の前半はクシヤン民族がササン王朝から独立し、東方からササン朝を脅かす勢力として恐れられてゐた時期である。殊に五世紀中頃はキダール王朝治下のクシヤンがヒンドウクシユの南北に領域を拡め、クシヤン民族最後の栄光を輝しつつあつた時代である。アルサケス王朝の支持者がクシヤン民族に非常な望みを囑したのは当然である。これと全く同様に、コスローがアルタシールに対抗するためにその親族にクシヤンの兵士を集めて来り援けることを要望したり (アガタングロス)、クシヤン人の国の全軍隊に來援を勧誘したり (ホレーン

のモーゼ）したことが、事実であつたかどうか明かでないとしても、それはバルティア帝国滅亡の時代、即ち紀元三世紀前半にアルサケス王家支持者がクシヤン民族に期待した所をよく現はしてゐるものと解釈される。

アガタンゲロスの記述には、前に述べた通り、クシヤン人の国をアルサケスの国定創設の地としたり、或ひはアルサケス王家の母国とするほどの強い憧憬が生れてゐない。ところが、五世紀前半の人ファウスツスにはクシヤン民族がアルサケス王家の出身であることが記されてゐる。

（第五卷七章）この時、ベルシアとアルメニアとの戦争は止んだけれども、なほ、アルサケス家の出であるクシヤン族の王（*Le roi des Kouschans, qui était d'origine arsacide*）はササン朝のサポル（*Sapor, Shāpūr II, 309—379*）王に対して戦を挑んだ。この王子「サポル」はその軍隊の全部と彼がアルメニア人の国から捕虜としてつれて来たすべての騎兵を集結して、進撃の命令を下し、自らは「アルメニア王」アルサケスの宦官を伴つてその先頭に立つた。（略中）クシヤン人の王とベルシア人の王との戦が一度始まると、前者の軍はベルシア人の軍を甚しく疲らせ、その敵「即ちベルシア軍」の多くを捕虜にし、その他を駆逐した。（略中）

彼「サポルに従つたアルメニア王アルサケスの宦官トラスダマッド「*Trasdamad*」はクシヤン人がベルシア人の王サポルに挑んだ戦に参加した。この戦においてトラスダマッドはその武勇を轟かし、サポルの命を救つた。彼は多くのクシヤン人の戦闘力を奪ひ、多くの敵の首を「その主サポルに」捧げた。（*Langlois, I, p. 285—286*）

そして、トラスダマッドがその戦功の褒賞として、当時ベルシアに捕へられ、クジスタン（*Khuzistan*）にあつたアルメニア王アルサケスに会ひ、そこで死んだことを記してゐる。従つて、この時のベルシアクシヤン戦争はアルサケスがササン朝に捕へられて以後、その死に至る以前のことになる。アルサケスは三三八年に即位し、三十年位に在り、三六八年に死に、

その子バブ (Bab, Pap) は、三六九年の始、一時東ローマに逃れ、三七〇年にアルメニアの王位を嗣いだのであるから、これは三六八年の事としてよいであらう。

バブは、前述の如く、三七四年頃、東ローマを裏切つてササン朝と結ぼうとしたので、ローマの將軍トライヤヌスのために暗殺され、ローマはヴァラズタッド (Varaztad, 374—378?) なるものを立ててアルメニア王とした。そしてこの王の時に、ササン朝のシャーブルは再びクシヤン人と戦つた。ファウスツスに曰く、

(第五卷三七章)「ペルシアのサボル王の捕虜になつてゐたマヌエル (Manuel) とゴムス (Goms) とがアルメニアに歸つてくる」少し前に、ササン種の、ペルシア人の王 (le roi des Perses, de race sassanide) は、パフル (Pahl) の町に住んでゐた、アルサケス種の、クシヤン人の大王 (le grand roi des Kouschans l'arsacide) と戦つてゐた。ペルシア人の王は、クシヤン人と戦はせるために、その軍隊を派遣したが、同時にアルメニア人の捕虜を釈放した。マヌエルとその弟のゴムスとはその中の一人であつた。敵軍「ペルシア軍」との間に戦が始まると、クシヤン人はペルシア軍より優勢で、ペルシア軍は間もなく退却した。クシヤン軍はこれを追ひ、「ペルシア軍の」隊列の中で殺戮を恣にしたので、これを逃れて敗戦の報を「ペルシア王に」齎すことが出来たのは、アルダシン (Ardaschin) の子であるマヌエルとその弟ゴムスだけであつた。(Langlois, I, p. 298—299)

マヌエルとゴムスとはアルメニアに歸り、ヴァラズタッド王を遂つてアルメニアの支配権を握るので、マヌエルの目撃したペルシアリクシヤン戦争は、ヴァラズタッド失脚のやや以前で、三七七年か三七八年のこととしてよいであらう。

ファウスツスに記されてゐるこれらのクシヤン人が、バクトリア地方のクシヤン人であることは言ふまでもないが、それをアルサケス種族としてゐるのは、ファウスツスの時代即ち四世紀の末か、五世紀の前半にクシヤン人とアルサケス王家と

が結びつけられてゐたことを示してゐる。しかし、ファウスツスの書きぶりは、クシヤン人がアルサケス種に属するといふ、アルサケス種に重きを置いた態度である。ところが、モーゼに至つては、クシヤン人の国をアルサケス種の母国であるとき、むしろクシヤンが中心でアルサケス一族こそその分れであるとする書方である。かうした変化は、それぞれの時代におけるクシヤン民族に対するアルメニア人の期待の変化を示してゐるものとして始めて正しく理解されるのである。ホレーンのモーゼのアルメニア史の編纂年代には、五世紀説・七世紀説・九世紀説があるけれども、クシヤン民族とアルサケス王家との關係について記した所について考へると、それは五世紀後半に書かれたものとして最もよく理解される。

モーゼの引用するマルシアパスリカティナは、アルサケスがクシヤン人の国の Pahl Aravadin という町において、パルティア人を治めたと書いてゐる。これはクシヤン人とアルサケスとを同等の位置においての記述と見られるので、ファウスツスとモーゼ自身との中間に置かれるべき性質の記事で、それは自らこの記事の年代がファウスツスとモーゼとの中間にあつたことを示してゐるのであらう。

五　　む　　す　　び

以上述べた所を要約すれば、

(一) バルデサネス (153/4—222/3) の著としてゼノブに引用されてゐる「エフタル人王国史」及び「ヂェン人王国史」は、いづれも、エフタルの勃興した五世紀後半以後の著作で、バルデサネスに仮託されたものである。

(二) それらはアルメニア王コスローを暗殺したアナゲの子スウレーンがエフタル王妃（或ひは王子の妃）である叔母に養はれ、叔母の死後、ヂェン即ち支那の支配者になつたといふ物語を記したものである。ヂェンはアルメニアの最も有力な貴族の

筆頭マミコニアン家の出身地として、バプ王の時代、即ち三七〇年以後、特に人々の注意に上つた国であるが、スウレーンがエフタルやチェンに結びつけられたのは、聖グレゴリウスの弟としてのスウレーンの事蹟を飾るとともに、衰残のアルサケス王家をこれらに結びつけることによつて補強し、その栄光を加へようとしたものと考へられる。そしてそれは更にアルサケス王家の始祖アルサケスがエフタル民族の出身であるといふ伝承にまで發展する。

(三) アルサケス王家と東方の有力国家乃至民族とを結びつけようとする動きは、エフタル民族勃興以前から見られる。それは先づクシヤン人をアルサケス種とするものであり（ファウスツス）、それは次にはアルサケスが最初クシヤン人の国に君臨したといふ伝へに發展する。特にクシヤンとの關係を強調してゐるのはホレーンのモーゼのアルメニア史である。これはササン朝に対立し、これを東方から脅してゐたクシヤン民族を、アルサケス王家の母国とし、それによつて王家の勢力挽回を期待する政治的意図に出たものと解釈される。アガタンゲロス・ファウスツス・マルリアパスリカティナ・ホレーンの記述の相違はそれぞれの時代におけるアルサケス王家の國際的並びに国内的の、政治的社会的地位の相違を示してゐるものであらう。

いづれにしても、エフタルやクシヤン民族とアルサケス王朝とを血縁的に、或ひは被支配者と支配者との關係において、結びつけるのは、衰残のアルサケス王家の政治的社会的地位を強化しようといふ特殊な意図から出た作為であつて、これを歴史的事実と看做すことは出来ない。現存のアガタンゲロスのギリシア語本の序文（アルメニア語本にない部分）にパルティア帝国の領域がペルシア・アルメニア・インド・マッサゲーテ王国の四域に跨つてゐたことを特筆してゐる（Langlois, I, p. 109）。ペルシア・アルメニアがアルサケス王家の支配下にあつたこと、またアフガニスタン南半からインダス河流域地方が紀元前二世紀の後半から紀元後一世紀の後半までサカ民族或ひはパルティア帝国の有力者の支配下にあつたことは

事實であるが、アルサケス王家がマッサゲテ王国即ちコーカサスの北、カスピ海の東方、インドの西北方に当る、南口シア・ロシアリトルキスタン・アフガニトルキスタンを中心とする地域の諸民族のすべてをその支配下に置いてゐたことは嘗てなかつた。⁽⁶⁰⁾ アガタングロスのこの記述がアルサケス王家の勢力を誇示しようとする意図に出てゐることは疑ふことが出来ないが、それがアガタングロスの創作ではなく、当時一部の人々の間に信ぜられてゐた所であつたとすれば、クシヤン民族やエフタル民族がアルサケスの属民であつたといふ所伝が成立した理由の一つは、さうした所信にあるのかも知れない。それはいづれにしても、アルメニア史書のアルサケス王朝とクシヤン・エフタル両民族との結びつきに関する記述は、アルメニアの置かれたそれぞれの時代の国際情勢を反映して作爲されたもので、史実とは考へられないのである。

附 記

(一) ホレーンのモーゼに引くマルシアパス＝カティナに、ヤペテ (Japet) の四代の孫ハイグ (Haigh) の後裔であるアラム (Aram) が、クシヤン (K'ušan) 人の例に倣つてアルメニアを二年間隸屬せしめたメディア人でマテース (Matés) といはれたニウカル (Niuk'ar) を捕へ、その衆を潰滅させたことを記してゐる (I, 13)。ラングロアはこのクシヤンをカシイト人 (Kassites, Kassî) であるとしてゐる (Langlois, I, p. 23 n. 1)。しかし、カシイト人 (Kassû) をクシヤンと呼んだ例は他には見当らないし、カシイト人のアルメニア支配を実証する史料は見出されてゐない。ラングロアの説明はなほ人を首肯せしめるに足りないやうである。

(二) ロスローがアナグに与へることを約束した Pardav (Bartav) の Pahlav (Bahlav) の中、Pardav が Old Pers. Par/ava- でパルティアを指してゐることは明かであるが、Pahlav の意味は必ずしも明瞭でない。ホレーンのモーゼはアルサケスが Pahl に住んでゐたので、その子孫をこの名で呼ぶといふ (II, 68)。また K. Aslan, *Études historiques*

sur le peuple arménien, Paris 1928, p. 128—129 n. 4 に於て Pahlavi と Parthe とは畢竟同一名に過ぎないが、アルメニア人からすると、バクトリアの系統が Pahlavi の主流 (Pahlavi par excellence) 即ち最も純粹な Pahlavi なのであると記してゐるが、アルサクスの Pahl 實都説は寧ろペルシアにおけるアルサクスの子孫が某 Pahlav と稱した事実から、生れたと見るべきであらう。今日では Pahlav を Parthav の転訛であるとするのが通説であるが、この場合はアルサクスの子孫が某 Pahlav と呼ばれたことから考へて、アルサクスの子孫の直轄領地といふ意味で、コスローはペルティアにおけるアルサクス王家の直轄領土を返さうと言つたのかも知れない。姑く疑はしきを置いて後の考をまつ。

(三) モーゼ (Moïse de Khorène, II, 72—73) によると、コスローがペルシアにゐた一族に協力を呼びかけた時、唯一人 Karnan Pahlav の一族 Vehsajan が断じてアルダシールに服従しないことを宣言したため、アルダシールはその一族を塵殺し、僅かに一人の乳呑児がブルズ (Purz) といふ忠実な「父の」友人に育てられてゐたのが、クシヤン人の国に逃れ、その一族に会つた。アルダシールはこの子を見つけようとつとめたが成功せず、子供はカムサラカン (Kamsarakan, Gamsarian) 氏の祖となつたといふ。この話もササン朝に対抗するためにクシヤンの勢威を借りた物語である。

註

(一) 以上の諸書に関する記述は Langlois, Collection に見える
 解題 F. N. Finck, Die armenische Literatur (Die orientalischen Literaturen, 2nd ed., Leip. u. Berlin 1925, p. 332—339); A. Christensen, Iran sous les Sassanides, 2nd ed., Copenhagen 1944, p. 77—79; G. Furlani, Letteratura armena (In: Le Civiltà dell'Oriente, Letteratura, Roma 1967, p. 217 ff.) 等によつた。この中フーマヌシンスの書名

は、ラングロアには「歴史文庫 (Bibliothèque historique)」としてゐるが、一八三二年のヴェニス刊本、一八八三年のセントペテルスブルグ刊本は、何れも「アルメニア史」(Pamut'ya Hayoc) といふ名 (I. K. Kusik'yan, Ocherki istoricheskogo sintaksisa literaturnogo armjanskogo yazyka, Moskva 1969, p. 156)。またホレーンのモーゼのアルメニア史については、五世紀とすべし説の他に、六世紀説 (H. Hübschmann, Die

armenischen Ortsnamen, IF, 16, 1904, p. 198) 十世紀説 (A. v. Gutschmid in *Encycl. Britannica*, XVII, 1883, p. 861—863 = *Kleine Schriften*, II, p. 283—331 (後者未見)); J. Marquart, *Untersuchungen zur Geschichte von Erân*, II, *Philologus* 55, 1896, p. 235; *Do*, *Iranšahr*, Berlin 1901, p. 6) 九世紀説 (P. Nerses Akinian, *Moses Khorenatzi. Die Abfassungszeit der Geschichte Armeniens und die Persönlichkeit des Geschichtsschreibers im neuem Lichte*, WZKM, 37, 1930, p. 204—217) など (九世紀説の詳細については五四頁注63を見よ。) しかし、モーゼの書は九世紀までに後人が手を加へたことがあるにしても、その主要部分は五世紀に成つたと見るべきである。本篇に扱つたやうに、モーゼはクシャーン人の国即ちバクトリアをアルサケス王朝の最初の根拠地としてゐるが、エフタル民族には触れてゐない。これはエフタル民族の勃興した五世紀中期以前、クシャーン民族がなほササン朝ペルシアと争つてゐた時代に、イランとアルメニアで主権を失つてゐたアルサケス王家をクシャーン民族に關係づけて、その勢力の挽回を期待したものと考へるべきで、モーゼの書が五世紀の中頃以前に書かれたことを示すものであらう。またプサンタ(ギリキアの Podandus)のファウスツスといふのが正しく、ピザンティウムのファウスツスといふのは正しくないこと、それが本来シリヤ語で書かれたもので、ギリシヤ語ではなかつたと考へられることについては E. Stein, *Histoire du Bas-Empire*, II, Paris-

Bruxelles-Amsterdam 1959, p. 835—836 の注25に於ての諸論文を見よ。

(2) ローマがこれを承認したのは六六年である。なほホレーンのモーゼはアルサケスがその弟ヴァルシヤック (Vagharschag) をアルメニア王に任命し、これがアルサケス王家のアルメニア支配の最初であると記してゐる (I, 8: II, 3)。フルバーニ氏はモーゼに於けるこのアルサケス王家のアルメニア支配を前二四九年に於けるものと認めるが (G. Furlani in *Le Civiltà dell' Oriente*; *Letteratura*, p. 219) 正確は明かに Langlois, *Collection*, II, p. 386 の年表の紀年をそのまま採つたもので、如何かと思はれる。しかし、いづれにしてもホレーンのモーゼはバルティア帝国の創設者アルサケスの時代から、その子孫が引続きアルメニアを支配したものと見て、その歴史を書いてゐる。

(3) 三八六年説は H. Pasdermadjian, *Histoire de l'Arménie depuis les origines jusqu'au traité de Lausanne*, Paris 1949, p. 122. 二八十年説は E. Stein, *Histoire du Bas-Empire*, I (Texte), Paris-Bruxelles-Amsterdam 1959, p. 205—206, 279.

(4) 四一九年説は H. Pasdermadjian, *op. cit.*, p. 122. 四二八年説は E. Stein, *op. cit.*, I, p. 281.

(5) F. Altheim in *Historia Mundi*, 4, Leip.-Berlin 1956, p. 531 の他。

(6) 例へば I. K. Kusik'yan, *Očerki istoričeskogo sin-*

- 見たいもの (Langlois, I, p. 67 et n. 3, 336; Prudhomme in JA, 1863, 2, p. 405)° ウクタネースには「アルメニア史」(Ukhtane Episkopos, Patmut'ivn Hayoc. Vagharsapat 1871, cf. I. K. Kusikryan, *op. cit.*, p. 158)の著があるが、恐らくこれとは別であろう。

- (20) Sukiai de Somal, Quadro della storia letteraria di Armenia, Venezia 1829, p. 12 (JA, 1863, 2, p. 405; Langlois, I, p. 336)° 但その理由は明らかでない。
- (21) H. Hübschmann, Die altarmenischen Ortsnamen, IF, 16, 1904, p. 218—219, 469.

- (22) *Ibid.*, p. 408.
 (23) Langlois I. p. 102.
 (24) Langlois, I, p. 100—101.
 (25) Langlois, I, p. 125.
 (26) p. N. Akinian, Elisäus Vardapet und seine Geschichte des armenischen Krieges, I, Wien 1932, p. 374 (*cf.* Christensen, *op. cit.*, p. 78 n. 7).
 (27) Kleine Schriften, III, p. 394 ff. (*cf.* Christensen, *op. cit.*, p. 77 et n. 5); H. Hübischmann, IF, 16, 1904, p. 197;
 G. Furlani in Le Civiltà dell' Oriente, Letteratura, p. 220.
 (28) Furlani, *Ibid.*, p. 220.
 (29) Saint-Martin in Lebeau, Histoire du Bas-Empire, IV,

lois, II, p. 121 b n. 6), C'en de faghfur 即ち天子の意である。これをモーゼが「王国の名譽」(Nativ t'agavorut'ean)と説明した理由は明かでないが、モーゼのアルメニア史には bakur といふ名の人が何人か出てゐる。アルメニアの各族の一つであるシハニ (Sivniac) の家系 Bakur (Moïse de Khorene, II, 63; cf. Langlois, II, p. 247 [Ejisee], p. 306 [Lzare de Pharbe])、キリスト教を国教にしたティリダーテスの治世に続いた混乱時代に独立したアウジヨニク (Aghjnik) の王子と呼ばれた Bakur (Moïse de Khorene, III, 4; cf. Langlois, II, p. 386) メスロップの保護者であつたイベリヤ王 Bakur (III, 54) などがある。

- (86) Christensen, Iran sous les Sassanides, 2nd ed., p. 452 ff. (nahravān); Geo Windengren, Recherches sur le féodalisme iranien, Orientalia Suecana, V, 1956, p. 102 ff.
- (89) マキニアン氏はモーゼのアルメニア史が「(開卷第一に Bagratuni 家の Sahak なる人の書に) よつて書かれたと記し「(但し一八四一年ヴェニス刊本だけにある。ラングローア訳本にはない)」第一巻のはじめに「この著作の始めに當つて Bagratuni 家の Sahak に感謝する」と記してゐる。(i) Bagratuni 家は八、九世紀になつて抬頭し、親アラビア政策を採つてマシコニアン家に対抗し、七三二年にアラビアの行政長官 Mervan の後援によつて大將軍 (oberbefehlhaber = sparaet) の一人になり、マシコニアンを圧倒したこと。(ii) モーゼはエデッサ・イェルサレム・

アレキサンドリア・ローマ・アテネ・ビザンツで学んだことを自記してゐるのに (III, 62; 68) そのアレキサンドリアについての記述は到底親しく見聞した所に基いたものとは思はれないこと。(iii) 八世紀の史家 Leontius (Chewond) の著述と同じ記述のあること。(iv) モーゼの記述の中に (I, 22)「メテス人 (Marac) の支配下においてアルメニア人の喫した苦楚に託して、著者の時代の当面した苦しみを記してゐると信ぜられる箇所があり、それはハルーン・アル・ラシード (786—809) 時代のアルメニアに対するアラビアの圧政を言つてゐると解されること」(v) モーゼのアルメニア史を最初に引用してゐるのが十世紀の史家 Johannes Katholikos であること。(vi) モーゼの郷貫であるところの Khoren 又は Khorean といふ地名は存在しないこと。等を理由に「モーゼのアルメニア史は九世紀の最初の十年代に書かれたもので、真の著者は Leontius であり、更に他人による改変が加へらるゝこと」(vii) Moses Khorenatzi の名が正しいか否かは未定であることを主張してゐる (P. Nerses Akinian, Moses Khorenatzi: Die Abfassungszeit der Geschichte Armenien und die Persönlichkeit des Geschichtsschreibers in neuem Lichte betrachtet. WZKM, 37, 1930, p. 204—217)。この見解に従へば、モーゼにマシコニアン家のことが過小に伝へられてゐる理由が諒解出来るやうに見えるが、実は必ずしもさうでない。モーゼはマシコニアン家を決して悪くは言つてゐないし Bagratuni 家を特によく言つてゐるわけではない。またモーゼがそのアルメニ

「史」Bagratuni 家の Sahak の注文を書いたことであつて、この Bagratuni 家を十一、八世紀以後のものとする必要はない。四八一年から四八二年までのアルメニアの行政長官 (Marzban) であつた人、Sahak Bagratuni が、Langlois, II, p. 387; J. De Morgan, Histoire du peuple arménien, p. 359) の、この人の依頼に応じて書かれたと解釈して決つて支障はない。またギーザの Khor (II, 7) の、この氏族の存在を述べた。Khoren は、Khoren ではない。氏族ではない。ある。

- (40) Yule-Cordier, Cathay and the Way Thither, I, p. 203 にも引かれてゐるが極めて不完全である。

- (41) Ammianus Marcellinus, I, (Loeb Classical Library), Introduction, p. ix-xv. 拙稿「シグナヤナと匈奴」(史学雑誌六四ノ六) 参照。

- (42) Jean Sauvaget, Relation de la Chine et de l'Inde, Paris 1948, p. 20 [45], 61.

- (43) S. Konow, Kharoshthi Inscription, Calcutta 1929, p. lxxx, 163 (XXVII, 3, LXXXV, 1, LXXIV, 1).

- (44) この註は、サハク・バグラトゥニの「シグナヤナ」(シグナヤナ) (Darial) の「シグナヤナ」(Bahl ou Balkh) の註 (シグナヤナ) (Djor) の註、サハク・バグラトゥニの註 (Derbend, Darband) の註、サハク・バグラトゥニの註 (Langlois, Collection, II, p. 185 b, n. 2) の註、シグナヤナに關係のある門は「シグナヤナ」である。

- (45) Langlois, II, p. 186.

初期アルメニア史書に見えるエフタルとクシヤン 榎

- (46) 拙稿「キターラ王朝の年代について」〔東洋学報第四十一卷三頁所収〕参照。

- (47) Marquart, Īrānshāh, p. 56—57, u. Ann.

- (48) Ibid., p. 56 u. Ann. 1.

- (49) ヴーローズ (457—484) の時代から五九一年までの史実を記録してゐる。Langlois, I, p. 155; Christensen, Iran sous les Sassanides, 2nd ed., p. 79.

- (50) Langlois, I, p. 198 b n. 2 (cf. Langlois, I, p. 364 a, 369 a; II, p. 328 a). schahasdan < Pers. *šahistān = "royal territory"

- (51) Marquart, Īrānshāh, p. 59 u. Ann. 1.

- (52) 同、K. Brugmann, Vergleichende Laut-, Stammbildungs- und Flexionslehre der indogermanischen Sprachen 2nd ed., I, Strassburg 1897, p. 512 (§ 581, 2), 529 (§ 581, 4) 参照。

- (53) J. Marquart, Südarmenien und die Tigrisquellen, Wien 1930, p. 63*; Geo Windengren, Recherches sur le féodalisme iranien, Orientalia Suecana, V, p. 118 ff.

- (54) Geo Windengren, op. cit., p. 100 ff. tun は本米家・王家・土地や意味 (H. Hübschmann, Armenische Grammatik, Leip. 1897, p. 498; IF, 16, 1904, p. 389)。

- (55) ヤーネオスの「クラクリウス帝時代史」(Īrānshāh, p. 66 所引) 参照。これは五世紀の末から六六一年ムーアウィアのカリフ就

在ちどの歴史を書いたものか、クレタクリウスとロベロー「世」の競争といふことが美濃の武闘といふことが証明される。

- (26) Józef Wolski, Arsace Ier, le fondateur de l'Etat parthe (en polonais), Eos, 38, 1937, p. 492 ff., et 39, 1938, p. 244 ff.

D₀, Effondrement de la domination des Séleucides en Iran, etc., (en polonais), Eos, 40, 1939, p. 23 ff.

D₀, Arsace II, Eos, 41, 1940/41, p. 156 ff.

D₀, Le problème d'Andragoras, Serta Kazarowiana, Sofia 1950, p. 111 ff.

D₀, Remarques critiques sur les institutions des Arsacides, Eos 46, 1952/53, p. 59 ff.

D₀, The Decay of the Iranian Empire of the Seleucids and the Chronology of the Parthian Beginnings, Berytus, 12, 1956/57, p. 33 ff.

D₀, Studia nad ustrojem monarchii Arsacydów. Sprawozdania Polska Akademia Umiejetności 47, 1947, p. 24—26.

D₀, L'historicité d'Arsace Ier, Historia, VIII, 2 (1959), p. 222—238.

- (27) J. Wolski, L'historicité d'Arsace Ier, Historia, VIII, 2 (1959), p. 231.

- (28) F. Altheim, Weltgeschichte Asiens im Griechischen

Zeitalter, II, Halle 1948, p. 14; *D₀*, Historia Mundi, 4, (Römisches Weltreich und Christentum), Bern 1956, p. 516.

- (29) E. Stein, Histoire du Bas-Empire, I, p. 137, 187, 488 n. 35.

- (30) B. Philipp Lozinski; The original homeland of the Parthians, 'S-Gravenhage 1959, pp. 55. はベルテニアの勢力圏が東にシベリアにまで及んでゐたことを論證しようとしたものである。その論證の多くは賛成し難い。今は詳しい論證を敢へず。